

平成 25 年度 修士論文

ICT を活用したプレゼンテーションによる英語教育
～協同学習を活かした授業づくり

三重大学大学院教育学研究科

教育科学専攻 学校教育領域

212M004 坂倉 好子

2014 年 2 月 13 日

目次

- 序章 第一節 問題意識
- 第二節 先行研究
- 第三節 研究対象と方法

第一章 英語教育における「協同学習」と「ICT」の活用

- 第一節 英語教育における「協同学習」
 - 第一項 「協同学習」の定義
 - 第二項 協同学習の歴史
- 第二節 英語教育における「ICT」の活用
 - 第一項 ICTとは
 - 第二項 ICT活用教育の歴史
 - 第三項 ICT活用英語教育の今
 - I ICTを英語の授業に取り入れる意義
 - II F中学校のデジタルテキストを用いた実践と効用
- 第三節 「ICTを活用したプレゼンテーションによる英語教育～協同学習を活かした授業づくり」の今
 - 第一項 K中学校 英語授業での実践
 - 第二項 S中学校 英語授業での実践
 - 第三項 F中学校 英語授業での実践

第二章 F中学校における実践分析

- 第一節 子どもたちの英語の学習に対する意識
- 第二節 実験授業
 - 第一項 名刺交換
 - 第二項 Show and Tell
 - 第三項 今後の展望と課題
 - 「Welcome to Fuzoku Junior High School」
 - 4人班を活用したDVDの作成
- 第三節 アンケート結果と分析、インタビュー
 - 第一項 アンケート結果と分析
 - 第二項 生徒たち・先生方にインタビュー

おわりに

- (1) 本研究の到達点
- (2) 本研究の課題
- (3) 謝辞

序章

第一節 問題意識

筆者は、20年以上の間、英語教育に携わってきた。学校の中には、多くの課題がある。現代の教育現場において、「生徒たちが生き生きと主体的に学ぶことができる授業づくりについて模索し、実践する必要がある」と痛切に感じている。

中学校に入学した時には、希望に満ちていた瞳が、学習を重ねるにしたがって輝きを失っていくように感じられることがある。ベネッセコーポレーションの調査においても、英語学習に対するモチベーションが、だんだん低くなっていくという結果が報告されている。中学生の英語嫌いは、深刻な問題であると言える。2009年のベネッセ教育総合研究所の「中学校での英語学習」に関する調査では、英語を苦手・嫌いと感じている中学生は、約6割に達している。そして、そのうち8割弱が「中一の後半」までに英語を「苦手」と感じているという結果がでている。子どもたちの英語の学習に対する意識については、詳しくは、第2章の冒頭で述べる。

英語に対する苦手意識をどのようにしたら、減らすことができるのだろうか。学校の英語教育においてできることは、「英語を話す楽しさ」や「英語を使って意思疎通をする楽しさ」を実感することであると筆者は考えている。全員が楽しさを感じることは難しいとしても、6割もの生徒たちが英語嫌いに陥っているという現状は、深刻であり、何らかの方策が必要である。

学校教育における一斉授業にプラスして、筆者は、生徒たち同士が、英語を用いてコミュニケーションを行い、自分自身を表現できる機会を持てるような取り組みを行ってきた。英語によるインタビュー活動、アルファベットかるたといった短時間でできる活動を初めとして、班でのスキットの作成・発表や英語での「思い出スピーチ発表」等を授業に取り入れ、教師からの一方方向の授業ではなく、生徒たちがともに学び、高めあう活動を実践し、英語授業の改革を模索してきた。

今までにも英語教育は、様々な変遷を遂げてきた。筆者が、学生時代に受けた教育とはずいぶん変わってきている。かつて、文法と読解が中心であった時代に比べると英語教育は、コミュニケーション重視の方向に変化してきた。

学校の中でこそできる英語教育があることは確かである。

同世代の仲間たちとともに学び合うことができる場合は、学校において他にないであろう。特に 1 年生を担当すると生徒たちのめざましい進歩に驚きを感じる。

その中において、生徒自らが仲間とともに学ぶこと、成果を発表することによる効果を明らかにしたい。グループでプレゼンテーションを行うことは、それまでの学習に意味付けを持たせる。

筆者が、英語教育に問題意識を持ち始めたのは、大学 2 年生でのアメリカへの短期留学がきっかけであった。USIU (United States International University) には、スイス人、中国人、イタリア人、オランダ人などヨーロッパやアジアからたくさんの学生が英語を学びに来ていた。習熟度別少人数教育が実施されており、文法とリスニングによってクラス編成がなされていた。初日にテストが実施され、7 段階のレベルに分けられていた。だから、総合的な英語力は、クラスの中では、ほぼ同じであるはずだったが、コミュニケーション能力には、格段の違いがあった。日本人は、英作文や文法は良くできて、宿題レポートではいつも「Excellent!」の評価を受けていたが、discussion の時間になると全くできなかった。諸外国の方々が軽々と英語を使ってコミュニケーションをする姿に驚き、「今まで自分が受けてきた英語教育は何だったのか」と問題意識を持ち始めた。

授業は苦しかったが、異国の人々との交流は楽しかった。たどたどしい英語でも意思疎通ができると喜びが胸にあふれた。「何になりたいの」と聞かれて、「先生」と答えると「次の世代を育てる素敵な仕事ね」と言われ嬉しかったのを覚えている。

教職に就き、多くの生徒たちに英語を教えてきた。英語の音楽を取り入れたり、ゲームをしたり、映画を用いてのディクテーションをしたりと自分なりに、英語の楽しさを伝えられるような授業を工夫してきた。しかしながら、もっと現代的で、効果的に生徒の意欲を高めることができるのではないか、という課題があった。

8 年前に三重大学教育学部附属中学校に赴任し、研究と実践において学ぶことはたくさんあった。何度も授業を公開する機会を与えられ、その度にいろいろな角度からのご意見をいただくことができた。また、公開研究協議会には、毎回日本各地から多くの先生方が参加され、授業実践について交流を深めることができた。数年前に「学びの共同体」を導入し、全校の教室における座席の配置をコの字とし、全てのクラス

の生活班を男女市松模様の4人班に統一したことにより、授業の形態も大きく変わった。今では、協同学習を取り入れない授業は、考えられないほどである。

幸い大学院で研究する機会を得て、2012年春から、2年間学ぶことができた。その中で、ICTの活用が授業に有効であると感じることがよくあった。

また、質的研究というものがあると知り、その研究方法に大いに興味を持った。質的研究においては、量的研究だけでは、知ることのできない人間の内面にまで踏み込んでいくことができる。なぜ、そのような結果に至るのか、どのような気持ちで行動しているのか、といった目に見えない原因や心情の変化を浮き彫りにすることができる。筆者が最も興味を持ったのは「半構造化インタビュー」である。インタビュー項目をある程度は決めておくが、インタビューの様子や返答によって、自由に内容を深めていくことができるからである。本研究では、抽出生徒とF中学校のALTにインタビューを行っている。ALTインタビューについては、第一章において、抽出生徒のインタビューにおいては、第二章において詳しく述べる。

第一章においては、現在の協同学習、ICT活用教育がどの程度進んでいるのか、どのような流れになっているのかを述べる。また、2013年度の公開研究会での取り組みから、公立中学校や大学の附属中学校では、どのような取り組みがなされているのかについて述べる。

第二章においては、F中学校1年生144名を対象にした実験授業の内容とアンケート調査の結果、生徒たちのインタビューから明らかになったこと、今後の展望について述べる。

新学習指導要領において、「基礎基本の充実」とともに「確かな学力」、「活用力」が掲げられている。実際には、基礎的な知識の定着はできても、その知識を活用するには至っていない。本当の学力を身に着けるためには、応用・実践する機会を生徒に与える必要がある。そのために、「協同学習」と「ICT」の活用は有効であると考えられる。「協同学習」についてジョンソン、ジョンソン、&ホルベック(2010)は、「協同学習のめざましい効果は、教師を実践へと動機づける力となるだろう」と、述べている。協同学習については、第一章第一節において詳しく述べる。ICTについては第一章第二節において詳しく述べる。

中学校に入学してきた生徒たちの英語教育に対する期待と失望がある。入学時には、期待に満ちていたのが、半年後に

は、つまずきを感じる生徒も多い。ベネッセコーポレーションの調査からは、生徒たちに英語の苦手意識やつまずきについてたずねたところ「文法が難しい」「英語のテストで思うような点数がとれない」「英語の文を書くのが難しい」「英語を聞き取るのが難しい」「単語を覚えるのが難しい」「英語を話すのが難しい」等の理由が挙げられていた。

最初の英語の挨拶や簡単な単語でつまずきを感じる生徒は少ないように見受けられるが、名詞の複数形、3人称単数現在形、人称代名詞を学習するようになるとだんだん分からなくなっていく生徒が増加するように感じられる。文法事項が毎時間次々と出てくるのについていけない生徒たちが苦手意識を感じるのではないだろうか。住吉中学校の報告からは、1年生より2年生のモチベーションが低いという報告がなされている。

江利川春雄（2012）は、『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』の中で次のように述べている。「教師は教える人、生徒は教わる人。この常識がいま、くつがえりつつあります。各地の教室で、学習者同士が小グループで仲よく学び合い、ともに高め合う協同学習が取り入れられ、めざましい成果をあげているのです」。また、「いま学校に必要なことは、子どもたち一人ひとりが認められ、尊重され、教室を安心できる居場所にする」と述べている。また、安永悟（2006）は、「本来、学習は喜びと興奮に満ちた活動です。学ぶことの楽しさや面白さを知り、学び続けることの意味とその素晴らしさを体験してもらいたい」と述べている。筆者は、実際に「協同学習のワークショップ」に参加、体験し、その威力に感銘を受けた。

三重大学教育学部附属中学校の「めざす学校像」の第一項目には、「生徒自らの学びを表現しあう学校」と記されている。

本研究の目的を「英語教育において ICT を活用した協同学習を行い、その効果について検証する。」とした。

そこで研究仮説を立て、実験授業を実施した。仮説は、次の三つである。「協同学習を取り入れることにより、生徒同士が学び合い、英語を用いる楽しさを感じることができる」「ICT と協同学習の組み合わせによって英語でプレゼンテーションする楽しさが創出でき、それが英語嫌いをある程度防ぐ効果がある」「ICT と協同学習の両者の強みを生かし、生徒同士のコミュニケーションツールとして ICT を活用することで、子どもたちの英語学習に対する意識を変えることができる」

実践の計画は、次のようである。まず、協同学習を用いた授業実践、ペア学習・4人班での学習を進める。その後、ICTを活用した実験授業を行う。研究対象は、三重県 国立 F 小学校中学 1 年生 144 名である。

研究方法は、協同学習と ICT を取り入れた授業の実践・記録、生徒たちへのアンケート調査を行う。「協同学習」「ICT」を導入した授業において、どのような効果があったかについてアンケート調査を行い、生徒たちの実情を明らかにしていく。

第二節 先行研究

英語教育における「ICT」と「協同学習」を取り入れた先行研究は、どこまで進んでいるのであろうか。また、どのような課題があるのであろうか。

江利川 春雄（2012）は、「教師の一方的な講義をどれだけ減らせるか。学生みずからが主体的に『授業づくり』に参加できるような能動的で自律的な学びの仕組みをいかにつくり上げるか。」について様々な工夫をしている。

「協同学習を取り入れた英語授業のすすめ」の冒頭で江利川（2012）は、次のように述べている。

「教師は教える人、生徒は教わる人」。この常識がいま、くつがえりつつあります。各地の教室で、学習者同士が小グループで仲よく学び合い、ともに高め合う協同学習が取り入れられ、めざましい成果を上げているのです。教室では、自分一人では達成が困難な高度な課題に向かって、ときには仲間と議論し、ときには一人で黙々と考えながら、学びを深めています。互いの意見を聴き合う関係が生まれ、お互いの心が絆で結ばれていきます。協同学習では、学力が高まるだけでなく、お互いを認め合うことで人間関係力が育ちます。その結果、問題行動も、いじめも、不登校も激減するのです。

つまり、教室の授業を変えることが、生徒たちの人間関係を変え、学校の問題も解決していく力があると言えます。

また、江利川（2012）は、次のようにも述べている。

協同学習を核とした学校改革である「学びの共同体」づくりを進める学校は、2012 年には、小学校で約 1,500 校、中学校で約 2,000 校（公立の約 2 割）、高校で約 300 校に達し、急速に増えています（佐藤、2012a）。部分的に協同学習を取り入れている学校は、その数倍はあるでしょう。こうして、たとえば静岡県富士市立岳陽中学校では、不登校の生徒を 38 名から 6 名に減らし、学力を市内 14 校中の最底辺からトッ

プレレベルに向上させました。(筆者中略) 国際的な学習到達度調査(PISA)でトップレベルのフィンランドをはじめ、欧米の多くの国々で、旧来型の一斉授業ではなく、小グループで学び合う協同学習が授業の基本スタイルとなっています。

一方、文部科学省も「教育の情報化ビジョン(2011)」で、「一斉学習や個別学習に加えて、『21世紀にふさわしい学び』として『子どもたち同士が教え合い学び合う協働的な学び(協働学習)を推進すること』」を明記している。

江利川(2012)は、「英語の映画教材を作成するプロジェクト演習」も行っている。授業づくりにおいては工夫を凝らし、初めの数回の授業では、冒頭で「英語しりとりゲーム」や「人間コピー機」などのチーム・ビルディングの活動を行っている。これらを通じて人間関係が円滑になり、結束が強くなる。ゼミの場合は一段とレベルを上げて、季節ごとの合宿、無人島キャンプ、ゼミ旅行、応用力学演習(ボウリング大会)、音声学演習(カラオケ大会)などで人間関係力を高めている。

本研究においても実験授業①では、クラスの仲間づくりをねらいの一つとして「名刺交換」を行った。プロジェクト学習を成功させるためには、まず、「人間関係の構築」は不可欠である。日常の授業の中で少しずつでも「人間関係力」を高める活動を取り入れていく必要がある。

さて、中学校では、どのような研究がなされているだろうか。

神戸大学附属住吉中学校における小集団学習への取り組みは、少なくとも1960年代にさかのぼることができる。当時は、生徒の創造性を育成する有効な学習形態として小集団が着目され、様々な検討の末に「バズ学習」が導入された。『教師よ教壇から降りよ』これは、本校において1967年(昭和42年)から実施された『創造性の育成』研究から生まれた合言葉です。」と「生徒と創る協同学習(2009)」には記されている。1980年代は、個と集団が共に活性化する実践を目指し、一斉学習・個別学習・小集団学習の効果的組み合わせが模索された時期であった。2000年以降には協同的な学びを実現するための「協同学習」理論の導入が始まった。

高木(2009)は、神戸大学附属住吉中学校の実践について述べている。「協同学習」と「ICT」を活用して、興味深い取り組みがなされ、成果をあげている。協同学習を実現する具体的方法として、英語を読むことや話す活動を、ペアワーク

を利用して進め、I C Tを有効に活用し、iPadを使って教科書の内容を紹介するデモンストレーションと教科書内容の個々のリスニング、プロジェクターと電子黒板を利用した教材やD V Dの提示、C Dやビデオを利用した英語の歌の学習などを進めている。

日々の取り組みの中で「協同学習」や「I C T」が豊富に取り入れられていることがわかる。その上で後半では「有名人を英語を使って紹介する」というプロジェクトに取り組んでいる。全7時間のこの単位では、命令文、3人称単数現在、疑問詞を用いた疑問文という文法事項と教科書の内容を学習した後、小集団で「世界の有名人について紹介する」という活動を行っている。生徒たちは、「ホームステイにやってきた外国人に有名人を紹介する」という設定で、有名人を友だちと協力して紹介した。

高木（2009）の研究では、プレテストとポストテストの正答率を比較し、その上昇で学習の成果を確認している。しかしながら、一人ひとりの生徒がその活動をどのように感じ、何に興味を持ったのか具体的なことは述べられていない。

本研究においては、選択式アンケート調査により量的な推移を示すとともに記述式アンケート調査、抽出生徒への半構造化インタビューを通して、質的研究を行う。その結果をもとにして、生徒たちの内面の変化をも明らかにしていく。

また、筆者は、2013年秋に開催された静岡大学附属島田中学校、筑波大学附属中学校、亀山市立亀山中学校の公開研究協議会に参加した。それぞれの学校で、様々な「I C T」と「協同学習」を組み合わせた取り組みがなされている。しかしながら、I C Tの活用が教師からの一方的な提示手段として使用されていたり、高度な取り組みではあるが、機材が整わないとできないという課題があった。これらの実践については、第一章 第三節 「『I C Tを活用したプレゼンテーションによる英語教育』の今」において詳しく述べる。

第三節 研究対象と研究方法

< 研究対象 >

本研究の対象は、三重県にあるF中学校1年生4クラス144名の生徒である。

< 研究方法 >

「英語学習への好感度」及び「英語学習への得意意識」のアンケート調査を4回実施した。また、実験授業Ⅰについては、授業に対する感想を記述式で調査した。実験授業とアン

ケートの実施時期は、以下のようである。

実験授業とアンケート調査の実施時期

2013 年 4 月 入学直後 アンケート調査①

F 中学校の入学直後の生徒たちの英語に対する意識調査を行い、「苦手・嫌い」と感じている生徒がどの程度いるのか、「得意・好き」と感じている生徒がどの程度いるのかについて調査した。

2013 年 5 月中旬 実験授業Ⅰ 名刺交換

協同学習を取り入れた活動を行い、生徒たちの授業での様子を観察し、授業に対するアンケート調査を行った。

2013 年 5 月下旬 中間テスト後 アンケート調査②

生徒たちの意識の変化を見るためにアンケート調査を行った。

2013 年 7 月 実験授業Ⅱ Show and Tell

ICT を活用したプレゼンテーションを 4 人班で行い、その練習過程において協同学習を取り入れた。

2013 年 7 月 一学期末 アンケート調査③

授業が生徒たちにはどのように受け止められたのか、また生徒たちの「英語学習に対する意識の変化」を見るためにアンケート調査を行った。

2013 年 12 月 二学期末 アンケート調査④

2 学期末の生徒の英語学習に対する意識の変化をみるためにアンケート調査を行った。

また、アンケート調査だけでなく、2013 年 12 月に F 中学校 ALT(Assistant Language Teacher)と抽出生徒への半構造化インタビューを行い、ICT と協同学習を英語教育に取り入れることについての質的研究を行った。

F 中学校では、中学 1 年生において少人数教育を実施しており、教室と国際理解教室に分かれての授業である。教室の授業は、A 先生が担当し、文法を指導する。国際教室においては、教科書の本文、新出単語、発表を中心に授業を行った。筆者は、2013 年 4 月から F 中学校に 2.5 日間勤務し、授業を行った。残りの 2.5 日間の授業については、B 先生が実施した。詳しくは、第二章において述べる。

【引用・参考文献】

(1) ベネッセ教育研究開発センター

「第一回中学校英語に関する基本調査(2009 年調査)」

(2014 年 2 月 9 日確認)

http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/hon/

- (2) 三重大学教育学部附属中学校 研究紀要 第24集『ともに学びともに高めあう学校の創造～つながりあう力がつく授業』、2007年
- (3) 無藤 隆・やまだようこ・南 博文・麻生 武・サトウタツヤ[編]『質的心理学 創造的に活用するコツ』新曜社、2004
- (4) ジョンソン, D.W. / ジョンソン, R.T. / ホルベック, E.J. 著 石田裕久・梅原巳代子 訳
『学習の輪 学び合いの協同教育入門 (Circles of Learning Cooperation in the Classroom)』二弊社、2010 p.13
- (5) 江利川春雄 編著『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店、2012 pp.3-4
- (6) 神戸大学附属住吉中学校・神戸大学附属中等教育学校『生徒と創る協同学習 授業が変わる 学びが変わる』明治図書、2009
- (7) 高木 浩志「ICTと協同学習を生かした英語科授業作りーカリキュラム作成と実践ー」日本情報教育学会 年間論文集、2009
- (8) 高木 浩志「協同学習が変える学びのかたちー神戸大学附属住吉中学校の実践を通してー」日本情報教育学会 年間論文集、2009
- (9) 神戸大学附属住吉中学校・神戸大学附属中等教育学校『生徒と創る協同学習』明治図書、2009
実践報告⑪ 学生たちと創る大学の英語授業 pp161-171
江利川春雄(和歌山大学教育学部)
実践報告⑨ ICTを活用した協同的な英語学習 pp134-145
田中 智恵(和歌山県立和歌山高等学校)
実践報告⑫ 協同学習を学校文化にー中学での実践 pp174-183 柏村みね子(東京都中野区立第三中学校)
- (10) 佐藤 学『教師たちの挑戦：授業を創る、学びが変わる』小学館、2003 pp.10-12
- (11) 佐藤 学『学校を改革するー学びの共同体の構想と実践』岩波書店、2012
- (12) ジョージ・ジェイコブズ、マイケル・パワー、ロー・ワン・イン『先生のためのアイデアブッカー協同学習の基本原則とテクニック』日本協同教育学会、2005、pp.18-21
- (13) 安永 悟『Learning through Discussion 実践・LTD 話し合い学習法』ナカニシヤ出版、2006

第一章 英語教育における「協同学習」と「ICT」の活用

第一節 英語教育における「協同学習」

第一項「協同学習」の定義

「協同と教育 第一号 日本協同教育学会」の巻頭論文から「協同学習」に関する用語の整理と定義を行う。

日本協同教育学会の英語名は、Japan Association for the Study of Cooperation in Education である。略称は JASCE と綴り、「ジャシー」と発音する。この名称は、国際組織 IASCE (International Association for the Study of Cooperation) の International を Japan に替えた名称である。

「協同教育」について、安永（2005）は、次のように述べている。

協同教育という新しいことばを使うのであればその意味を明確にすることが学問の作法である。協同教育に携わる多くの関係者が経験知として共有していると思われる最大公約数的な表現を用いれば、協同教育とは「協同学習の原理に基づく教育理念と教育方法の総称」といえる。より精緻な概念定義に関しては今後の議論が待たれるところである。この協同教育の理念と方法は、先にも触れたように、学校現場に限らず、社会のあらゆる場面における教育的な営みに活用することができる。加えて、学校の運営はもちろんのこと、社会に存在するさまざまな組織や団体の運営にも活かすことができる。人と人との関わり合いで成り立つ人間社会において、協同教育の理念と方法の汎用性の高さは実証されており、これらの分野における協同教育の展開が期待されているところである。（下線部 筆者加筆） p.7

それでは「協同」とは何であろうか。安永（2005）は広辞苑の解説から次のように述べている。

広辞苑によると、協同とは「ともに心と力をあわせ、助けあって仕事をする事。協心」、協働とは「協力して働くこと」、そして協調とは「(協同調和の意)利害の対立する者同士がおだやかに相互間の問題を解決しようとする事」とある。また、関連して共同（common の訳語）とは「二人以上の者が力を合わせる事。「協同」と同義に用いることがある。二人以上の者が同一の資格でかかわること」と説明されている。これらの定義からそれぞれを差異化すると、二人以上の者が事を行うもっとも広い意味が共同であり、特に心を合わせて

助け合いながら事を行う場合に協同という言葉が用いられるようである。さらに、協働と協同とは極めて類似した概念でありながら、協同が心理的側面に重点をおいた表現であるのに対して、協働は働くという身体的な活動を強調したものといえよう。また協調とは、立場の異なる者同士が何らかの課題解決のために連携し合う状態を指した言葉といえよう。(下線部 筆者加筆)」 p.11

協同とは、「ともに心と力をあわせ、助けあって仕事をする。こと。協心」とあるように精神的なことに重点が置かれていることがわかる。協同という言葉を用いる場合には「心を合わせて助け合う」必要がある。

新明解国語辞典によると共同とは「①ふたり以上の人が一緒に仕事をする。こと。②ふたり以上の人が同資格、同条件で関係すること」と定義されている。また、協同とは、「ふたり以上の人が力を合わせて仕事をする。こと」協働とは、「協力して働く。こと」と定義されている。協同については「力を合わせて」と心理面が重視されているようである。

また、語源として考えられる英語については、安永(2005)は、次のように述べている。

Cooperate と Collaborate の違いを小学館版ランダムハウス英和大辞典で確認したところ、cooperate「(共通の目的・利益のために) 協力する、協同する」、collaborate「共同して働く、(文芸・学問などで) 合作する、共同研究する」とある。やはり広辞苑同様、同じ目的に向かって心を合わせ、協力し合うことが cooperate であり、協同という訳が適していることになる。また、心を合わせるかどうかは別にして、共同して作業するのが collaborate であり、訳語としては協調あるいは協働の方が協同よりも適していると思われる。少なくとも collaboration に協同を、cooperation に協調を対応させるのは日本語として誤用ではなかろうか。

(下線部 筆者加筆)

本研究においては、安永の解釈にしたがって「協同学習」は、cooperative learning という言葉を用いる。

次に協同学習の定義について、安永(2005)は、次のように述べている。

協同学習の定義

協同学習とは協力して学び合うことで、学ぶ内容の理解・習得を目指すと共に、協同の意義に気づき、協同の技能を磨き、協同の価値を学ぶ(内化する)ことが意図される教育活動を指す専門用語である。単なるグループ学習の域を超え、

協同学習たらしめるために過去半世紀の間に、大小合わせると 200 以上の技法が開発されてきた。協同学習の定義については、研究者間で微妙に異なっているが (Johnson et al. 2002, Kagan 1994, Slavin 1992, 杉江 1999b)、共通項を整理する形で協同学習を、次の 4 条件を満たす (または、満たそうと意図される) グループ学習を協同学習と定義したい。

- ① 互惠的相互依存関係の成立: クラスやグループで学習に取り組む際、その構成員すべての成長 (新たな知識の獲得や技能の伸長など) が目標とされ、その目標達成には構成員すべての相互協力が不可欠なことが了解されている。
- ② 二重の個人責任の明確化: 学習者個人の学習目標のみならず、グループ全体の学習目標を達成するために必要な条件 (各自が負うべき責任) をすべての構成員が承知し、その取り組みの検証が可能になっている。
- ③ 促進的相互交流の保障と顕在化: 学習目標を達成するために構成員相互の協力 (役割分担や助け合い、学習資源や情報の共有、共感や受容など情緒的支援) が奨励され、実際に協力が行われている。
- ④ 「協同」の体験的理解の促進: 協同の価値・効用の理解・内化を促進する教師からの意図的な働きかけがある。たとえば、グループ活動の終わりに、生徒たちにグループで取り組むメリットを確認させるような振り返りの機会を与えるのである。

ここで付言すると、グループ内協同とグループ間競争を組み合わせた学習活動や、コンピュータネットワークで結ばれた個々人が時空の制約を超えて協調的に学習活動を行う場合でも、上の条件を満たせば協同学習の一形態と見なすことができる。(下線部 筆者加筆)

以上のように① 互惠的相互依存関係の成立 ② 二重の個人責任の明確化 ③ 促進的相互交流の保障と顕在化 ④ 「協同」の体験的理解の促進の 4 つの条件を満たすものを「協同学習」と位置付けているということが明らかになった。

さて、ワークショップで配布されている資料には、日本協同教育学会 (JASCE) の定義として次のように明記されている。

JASCE では、以下の 4 条件を満たすグループ学習を協同学習と呼ぶことにしています。

- ・ 互惠的な協力関係が成立している。
- ・ 学習集団の目標と学習活動における個人の責任が明確である。

- ・生産的相互交流が促進されている
- ・「協同」の体験的理解が促進されている

日本協同教育学会では互いに学び合い、高まり合う人間関係にもとづく様々な教育を協同教育と総称します。そして、協同学習を協同教育の中核的学習指導法と位置付けています。

理論編 2 より（下線部 筆者加筆）

また、関連用語「共同学習」「グループ学習」について安永（2005）は、次のように述べている。

人々が集まりグループを形成し、何らかの学習活動と一緒に
行うのがグループ学習であり共同学習である。自明だが、
グループ学習は学習者たちが少人数の集団で学ぶという形状
に対する最も広義な名称である。また、学習活動に際して共
同作業が求められるところから、共同学習と呼ばれることも
ある。したがって、グループでの協力的な活動が求められる
協調学習や協同学習は、共同学習という包括概念の中に含ま
れることになる。たとえば、学習者が地理的距離を隔てて作
業・学習する場合は、C S C L（Computer Supported
Collaborative Learning）なども含めてすべて遠隔共同学習
という名称で括ることができる。さらに、その学習活動の中
に相互の進捗状況をモニターしたり、作業遂行過程で意図的
に情報交流したり、課題によっては各地・各部署で役割分担し
たり、といった相互調整がしっかり組み込まれていれば、遠
隔協調学習あるいは遠隔協同学習と呼ぶことは可能だし、適
切であろう。（下線部 筆者加筆）

「協同学習」は、グループ学習（共同学習）、協調学習の要素も含みつつ、先に述べた4つの条件を満たす学習ということが言える。ただ単に数人のグループを作って学習するというだけでは、教育的な効果は期待できない。4つの条件を備えた学習を行うことで生徒たちの心理面まで踏み込んだ有意義な学習となる。

本研究における「協同学習」については、日本教育学会（JASCE）の定義と同じとし、上に述べた4つの条件を備えた学習と考える。

ジョンソン・ジョンソン・ホルベック（1998）は、「学習の輪」の中で次のように述べている。

すべてのグループ学習が協同学習なのではない

教室で教師がグループ学習を試してみると「これは混乱以

外の何ものでもない」と思ってしまうことが多い。あるグループでは、誰が文章を書くかで生徒同士もめている。別のグループでは、2人のメンバーがフットボールのおしゃべりをしていて、3人目の生徒だけが課題に取り組んでいる。「わたしのクラスの生徒は、協力して学習するすべを知らないのだ」とその教師は結論づけてしまう。

このような状況で教師はどうしたらよいのだろうか。単に生徒をグループに振り分け、一緒に取り組むように指示するだけでは、彼らが協同の方法を知ったことにならないし、もし彼らがそれを知っていたとしても実行するとは限らない。生徒同士を近くにすわらせ、彼らが一つのグループであると告げるだけでは、協同学習のグループで典型的に見られるような協同や成績の伸びや、その他の成果は生まれない。

(下線部 筆者加筆) (p.22)

単純に生徒をグループに分け、活動をするだけでは、協同学習とは呼べない。また、成果も期待できない。

本研究においては、単なるグループ活動ではなく、生徒たちの心理面を重視した取り組みを行った。それは、第二章において記述する。

さて、ここまで「協同学習」について述べたが、英語教育と協同学習とはどのような関係をもっているのだろうか。英語教育と協同学習の関係について亘理(2012)は、次のように述べている。

実践の現場においても、英語教育は協同学習と独特で密接な関係を持ってきた教科だと言えます。特に 70 年代に **Communicative Approach** が提唱されて以来、協同学習と何らかの関連を持ちうる諸活動やタスクが国内外で豊富に蓄積されています。しかしその一方で、英語によるペア・グループでの練習・活動の存在を自明視していたためか、特に国内において、その目的・内容・方法を協同学習の観点から考察すること、および活動以外の分析的な教育内容に対する協同学習の可能性が論じられることは十分ではなかったと言えるかもしれません。(下線部 筆者加筆)

確かに、英語教育においては、ペア・グループでの練習や活動の存在は、自明のことであり、ペアによる音読練習やグループでの活動は、今までにも多くの実践がなされている。

神戸大学住吉中学校、神戸大学附属中等教育学校(2009)『生徒と創る協同学習』では、次のように述べられている。

英語学習において、生徒のコミュニケーション能力を育成する上で、協同学習の果たす役割は重要です。協同学習で養われる人間関係やコミュニケーションの技能は、生徒同士が英語で対話したりコミュニケーション活動を行ったり、協力してグループ学習に取り組んだりする上で必要不可欠であり、様々な言語活動を豊かな活動に高める要因になると考えます。特に協同学習の基本的構成要素である相互協力関係、対面的・積極的相互作用、小集団での対人技能はコミュニケーションを成立させる上で重要な要素です。

(p.200) (下線部 筆者加筆)

単純な会話練習でも言語活動は成立するが、協同学習を用いることで「様々な言語活動を豊かな活動に高める」ことができると考えられる。「協同学習」とは、心理的側面に重点を置いた表現で「協働」は働くという身体的な活動を強調したもの、と整理された。「協同学習」は、互惠的相互依存関係が取り入れられているものである。グループのメンバーそれぞれが役割を持っているということが言える。

第二項 協同学習の歴史

協同学習という考えは、長い歴史を持っている。ジョンソン、ジョンソン&ホルベック(1998)は、「学習の輪」の中で次のように述べている。「協同学習というアイデアは、昔からある。協同するという能力は、われわれ人類の生存に重要な役割を果たしてきた。学習のためにはパートナーが必要であることがユダヤの教典『タルムード』にも明確に書かれている。生徒は互いに教え合うことによって利を得る、と1世紀のローマの修辞学者クインティリアヌスはいつている。(P.20)」1979年には国際共同教育学会(IASCE)が設立されている。

さて、日本における協同学習は、どのような歴史を持っているだろうか。杉江(2011)は、次のように述べている。「1950年前後から、日本ではグループ・ダイナミクスへの研究関心が高まってきます。そして、その成果を踏まえた小集団活用を特徴とした学習指導法が1950年中盤にあらわれはじめます。それは、実証的な研究成果に基づき、系統的な学習を効果的に進めることを可能にするものでした。バズ学習はその代表的な学習指導理論です。」バズ学習は、当初はバズ・セッションすなわち、講演会のような多人数の学習会でタイミングを見計らって6人グループを作り、6分間話し合いをさ

せるという集団活用の技術を授業に持ち込んだものであった。1955 年頃にバズ・セッションを用いた実践工夫の報告がなされたが、そういった研究成果と実践を整理し、理論化したのは塩田芳久であった。塩田は、「バズ学習方式」という学習指導論を作りあげた。

バズ学習について神戸大学附属住吉中学校の『生徒と創る協同学習（2009）』では、次のように述べられている。

バズ学習とは、ミシガン大学のフィリップスがバズ・セッションと呼んだものを 1956 年、塩田芳久が教科の学習に取り入れたもので、昭和 40 年代（1965~1970 年代）、日本の協同学習に影響を与えた学習方法の一つです。バズ学習は、一斉指導の中ではごく少数の児童生徒の発言に支配されてしまうという、集団討議の欠点を補う討議法として開発されました。

杉江（2011）によると「バズ学習は、塩田・阿部が著した『バズ学習方式一落伍者をつくらぬ教育』（1962）の発表前後から、1980 年代半ばまで、広く全国で実践化が図られました」。1980 年代に入ると、「個に応じた学び＝個別学習」という発想が大勢を占め、協同的な学習への関心が実践の場から薄らいでいった。

21 世紀に入り、協同的な学びは再び見直されてきている。2004 年には、「日本協同教育学会（JASCE）」が設立された。2008 年には、日本で国際共同教育学会も開催され、世界との交流の窓口も広がっている。

佐藤 学（1999）は次のように述べている。

この 30 年ほどの間に、世界の国々の教室は緩やかな様変わりを遂げつつある。今や多くの国々において、小学校の教室はもちろん、中等教育段階の学校においても、チョークと教科書で進める授業、黒板と供託を前にして一方向に机と椅子が並べられた教室は、博物館の資料室に入ろうとしている。新しい教室では 20 数人の子ども（生徒）たちが、いくつかのテーブルで作業をとおして協同で学び合っている。

「学びの共同体」では、学級を男女市松模様の 4 人班で構成し、学習を進めていく。

佐藤（1999）は、「これまでの勉強が個人主義的な活動であった」と批判している。

21 世紀の社会が、多様な人々が共存し共生し合う社会であるとするならば、他者のアイデアを積極的に受け入れ、自らのアイデアも惜しみなく提供し合うことが、学びのいとなみの基本にすえられる必要がある。近年の教育学は、アイデアを

相互に与え合い分かち合う学びを「互恵的な学び(reciprocal learning)」と呼んで、未来の学びのモデルとして提起している。勉強文化の個人主義は、学びへの転換において、個と個の擦り合わせの中で学び合う「協同的な学び」と「互恵的な学び」へと脱皮しなければならない。

「協同的な学び」「互恵的な学び」は 21 世紀の学びのキーワードであると言えよう。

第二節 ICT 活用教育 現状と課題

第一項 ICT とは

「ICT」のフルスペルは、「Information and Communication Technology」である。情報・通信に関連する技術一般の総称である。従来、頻繁に用いられてきた「IT」とほぼ同様の意味で用いられるもので、「IT」に替わる表現として日本でも定着しつつある。

「IT」のフルスペルは、「Information Technology」である。情報技術と訳されている。情報技術とは、コンピュータやネットワークといった情報処理関連の技術の総称である。英語の頭字をとって「IT」と呼ぶことも一般的となっている。情報処理という言葉は、日本国内では、計算機の利用が始まった当初から使用されてきた。1990 年代後半になると、米国において、コンピュータと通信に関連した技術を用いて、従来の事業概念を大きく突き崩すような事例が数多く登場しはじめた。これらは、単にコンピュータで情報を扱っているだけでなく、ビジネスモデルそれ自体が大きな衝撃とインパクトを与えた。とりわけ 2000 年の前後はインターネットの普及も進み、人々の認識や産業全体の構造にも変化を与えつつあった。このため、産業革命に倣って、「IT 革命」などとも呼ばれた。

「ICT」は、多くの場合「情報通信技術」と和訳される。「IT」の「情報」に加えて「コミュニケーション」(共同)性が具体的に表現されている点に特徴がある。「ICT」とは、ネットワーク通信による情報・知識の共有が念頭に置かれた表現であるといえる。日本でも、2000 年頃に盛んに提唱された「e-Japan 構想」(すべての国民が情報通信技術を活用できる環境を整えることを骨子として日本政府が 2000 年に策定した、日本型 IT 社会の実現に向けた構想のこと)では「IT」が盛んに用いられたが、2005 年を始点とする「u-Japan 構想」

（総務省が 2006 年から 2010 年にかけて実施している、ICT（情報通信技術）を推進するための政策）ではもっぱら「ICT」が用いられている。総務省の「IT 政策大綱」も、2005 年までにはすでに「ICT 政策大綱」に改称されている。

すでに海外では、「IT」よりも「ICT」のほうがよく通る名称として通用するようになってきている。「IT」は徐々に「ICT」へ移行していると見られる。

第二項 ICT の教育利用の変遷

学校教育での ICT 活用は、様々な変遷を遂げてきた。柴田（2011）によると「コンピュータの教育利用の初期の段階における代表例が CAI (computer assisted instruction)であり、コンピュータの黎明期（1950 年代）から、研究開発が行われている。初期の CAI は、コンピュータ上でプログラム学習を実現するものであり、ドリル(演習)やチュートリアル(説明)を中心としたものであった」。それでは学校でのコンピュータの利用は、いつ頃から盛んになったのであろうか。柴田（2011）は、次のように述べている。「学校でのコンピュータの利用が進むようになったのは、パソコンが普及し始めた、1980 年代からであり、一斉授業を補完する個別学習として CAI に期待が集まり、多くのソフトウェアが開発された」。

ICT を活用した教育方法に関する最近の研究は、盛んになってきている。ICT の活用のありかたは、学習観の変遷とも連動している。柴田（2011）は、今後の展望と課題について次のように述べている。

<p>教師の代わりをする CAI が教える道具としてのコンピュータであるとすれば、新しいスタイルは、<u>学習者が学び、考え、表現するための道具としてのコンピュータの利用である。学習者が自ら情報を主体的に発信・受信することを通して知識を構成していくという、構成主義的な学習観を背景にしている。</u>さらに、情報ネットワークの普及や学習共同体を重視する社会的構成主義の学習観を背景に、コンピュータによる協同学習の CSCL (computer supported collaborative learning) が盛んに研究されるようになる。（中略）<u>ICT の活用は、わかりやすい授業、学力の向上など、個々の学習者へメリットをもたらすだけでなく、学習者相互の学び合いを実現することも指向している。</u>すなわち、個別化をめざした CAI から学</p>
--

習共同体の形成を目指す CSCL へと変遷してきている」。(中略) このような構成主義や協同学習を重視する学習観を背景として、教育方法の情報化(端的には、教科学習のための ICT 活用)と、教育内容の情報化(情報活用や情報モラル等を含む情報教育)は、今後ますますその結びつきを増すであろう。教科の学習のために児童・生徒自身が ICT を活用する機会は、情報を活用する実践力を育成することにもなるし、またその中で情報を発信することの責任等も学んで行くことになる。(下線部筆者加筆)

広瀬一弥(2012)は、「小学校における ICT 活用の現状 指導者が使う活用から学習者が使う活用へ」の中で、小学 1 年生が生活科「お手伝い名人になろう」の学習で、家で児童自身がデジカメで撮影してきたお手伝いの様子を、学校の電子黒板で映し出し、みんなに紹介する活動を紹介している。「ICT を使うことで自分の伝えたいことが効果的に伝えられる」と結論付けている。広瀬(2012)は、ICT を誰が使うかという問題について、今までは ICT を指導者(教員)が使い、効果的に技能を習得させたり、知識の定着を計るというものが多かったが、児童が活用することによって、さらに多様な活用が考えられることを提案している。

協働学習へのかじ取りを

次々と学校現場に ICT。普及が進むにつれて、指導者の活用とともに学習者の活用が進んでいく。また、最後の事例で紹介したように入ってくる機器はよりパーソナルなツールになっていく。そこで大切にしたいのが、ICT を一人一人が個別に使うだけでなく協働で活用するといった視点だ。教育の情報化ビジョン(文部科学省、2011 年 4 月)の中では、ICT を一斉学習・個別学習に加え協働学習でも活用していくよう明記されている。

今後、整備が見込まれるパーソナルなツールをあえて協働でもつかう。ICT の利用が目的になることなく、ICT を使って何を学ぶのかを考え、授業デザインも実践していきたいと考えている。(下線部 筆者加筆)

「最後の事例」とは、ニュース番組作りを撮影から編集まで情報端末(iPad)を使って行った事例である。取材してきた映像のうちどれを使い、どのように並べるかをグループで相談して作成した。各々が端末を持っているので、一人ひとりが作品を作っていくこともできるが、あえてグループで制作させている。ともに計画を立て、話し合いながら編集していく

ことで、制作途中の言語活動の充実をねらっている。

指導者が使う活用としての ICT が有効であることは、確かなことである。それに加えて、子どもたちが ICT を活用して、様々な表現活動をしていくことができればさらに ICT の教育的効果は高まると考えられる。コンピュータを使って作品を作ったり、実物投影機を使ってプレゼンテーションをすることは、生徒たちにとって魅力的な学習活動になるであろう。

小学校での ICT 活用の取り組みが学校現場に普及してきていることは、中学校にとってもありがたい現状である。小学校での ICT を活用したプレゼンテーションを中学校では、英語を用いて行う事が可能である。小学校での学習経験を活かして、さらに高度な発表をすることができるであろう。小中連携が行われ、互いの学習内容についても交流が深まれば、見通しを持った取り組みが考えられる。

ICT 機器の活用には、各学校で条件に制限がある。多くの ICT 機器を持っている学校もあれば、発展途上でこれから整備していこうとしている学校もある。「今、ここで何ができるか」「どのような力を目の前にいる生徒たちにつけたいのか」に焦点を絞って授業を組み立てることが重要であると考えられる。

第三項 ICT 活用英語教育のいま

I ICT を英語の授業に取り入れる意義

ICT を授業に取り入れる意義について、吉田広毅(2012)は、次のように述べている。「ICT を授業に取り入れる意義は、どこにあるのでしょうか。かつて、ある中学校で、マザー・テレサを扱った英語の授業を拝見しました。そこでは、まず英語を使う雰囲気を作るために CD で英語の歌を流し、ついで、マザー・テレサに関するビデオを流し、その後フラッシュカード、黒板、教材提示装置、掛図、写真パネルと様々なメディアが駆使されていました。その授業の可否は別として、授業を担当した教員は、それが適切なメッセージと装置の組み合わせと考えて授業を設計したのでしょう。しかし、このような授業を毎時間行うことが可能かと言えば、恐らくは機器の準備や接続、切り替えなどの煩雑さを理由に、難しいという教員が多いと思います。これは、アナログのメッセージはその形態によって使用できる機器が異なるために生じる問題です。ところが、デジタルのメッセージであれば、文字であれ、音声であれ、画像であれ、どのような形態のメッセージ

でも、コンピュータを中心とした ICT 機器を使うことで、間断なく提示できます。これによって、教員は、好きなメッセージを好きな時に、好きなだけ授業で使えるようになります。つまり教員に授業の構想力さえあれば、いくらでも授業の幅が広がられるわけです。」

デジタル教科書の使用によりフラッシュカードも大きく見えるようになった。また、本文に関連した動画も間断なく提示することができる。

ICT 等の新たなメディアを導入する視点として、吉田(2012)は、次のように述べている。

授業に新しいメディアを導入する目的は、『これまでできなかったことをやる』ことだけではありません。その他にも重要な視点として、新たなメディアを導入することで授業の効果を高めること、そして、授業の効率を高めることがあげられます。例えば、英語の授業の効果を高める ICT の使い方として、教材提示装置（実物投影機、書画カメラ、OHC などとも呼ばれます）を使って教材を大きく見せたり、電子黒板の書き込み機能を使って重要な点を強調することで知識・理解の定着や共有を測ったり、実感を伴う理解を促すことがあげられます。英語の授業の効率を高める ICT の使い方としては、デジタル教科書を使ったり、教科書の本文やワークシートの記述を教材提示装置で映すことで、説明や発表にかかる時間の短縮を図ることがあげられます。授業の効果や効率を高める目的で ICT を使う場合には、これまでの授業をベースとして、ICT で代替したほうがいい部分を ICT に置き換えればいいだけです。

英語の授業での ICT 活用の形態と段階については、次のように述べている。

英語の授業では、教科書の本文を読むことがあると思います。従来の授業であれば、生徒は、教卓に置かれた CD の音声を聴いたり、教室の前の方にいる教師の声を聞きながら、目の前の教科書を読まないといけません。この場合、視線と耳が集中するポイントがずれてしまいます。しかし、教科書を大きく映せば生徒の目と耳が集中するポイントが一致しますし、文章を読んでいる途中でつまづいて読んでいる場所がわからなくなってしまうても、教師が読んでいる場所を指示棒などで示しながら読んでいれば、すぐに追いつくことができます。なお、デジタル教科書を使えば、読んでいる場所がハイライトされますし、CD などを用意する必要がなくなり

ますので、より授業の効果、効率を高められます。

まずは、従来の授業にどのように ICT を導入するか工夫することが第一段階と言える。次の段階として、吉田(2012)は、次のように述べている。「ICT 活用の第 2 の段階として、インターネット上の教材、コンテンツを使うことが考えられます。特に生徒の実感を伴う理解や擬似体験を促す意味での映像教材・コンテンツの活用が重要です。」英語学習においては、語彙や文法の学習とともに外国の文化や歴史、生活の理解も必要である。映像を役立てることは、有効である。

「第 3 の段階として、プレゼンテーションソフトなどを使って、教材を自作して授業で使うことが考えられます。プレゼンテーションソフトのアニメーション機能を使うことで、説明や発表に動きをつけられるとともに、大事な所を強調したり、焦点化を図ることができます。」このように ICT の活用は、様々な使い方が考えられる。

「教材を自作して授業で使う」ことは、準備に時間のかかる作業であるが、その効果は絶大である。指導者が自由に発想し、教材へとつなげることができる。第三節で述べる K 中学の実践でも自作の PPT が使用されていた。F 中学校においても社会科で指導者が実際に訪れた外国の写真をプロジェクターで拡大して生徒に示すという実践が行われていた。「生徒の目の前にいる教師は、最高の教材」とは、かつて年配の教諭から教えていただいた名言である。生徒たちは、目の前にいる指導者の経験談を聞いたり、自分たちの日常と教材がリンクしているとき大いに興味を示す。ただし、自主教材作成には、多大な時間と労力を要するため、既成のもの（デジタルテキストや映画、音楽）を上手に活用しながら、自主教材を組み入れていく方法が現実的と考えられる。

II F 中学校の実践と生徒アンケート調査結果

教師の側からインプットをする際、ICT の活用は有効である。ここでは、「ICT 機器を活用した授業づくりの効用と課題」について述べる。

F 中学校英語科において 2013 年 2 学期からデジタル教科書の導入が始まった。授業において、デジタル教科書の威力は、画期的であった。パソコン画面をプロジェクターでスクリーンに投影し、必要に応じて活用する試みが行われている。現在、中学一年生は、少人数教育を実施し、教室と国際理解

教室に別れて授業を行っている。国際理解教室には、壁いっぱいの大スクリーンが設置されている。

スクリーン、CD ラジカセ、パソコン、プロジェクターが設置されている。少人数教育実施のため生徒の席は、4 人班の 5 グループのみ。ホワイトボードが前部と後部の壁にあり、必要に応じて使われている。

1 デジタル教科書の効用

実際に教室で使用してみると様々メリットがあるとわかった。デジタル教科書に入っている項目の効用について述べる。

① デジタルフラッシュカード

生徒たちが顔をあげて、スクリーンを見ながら発音できる。画面いっぱいに大きくスペルが表示されるのでとても見やすい。耳で **native speaker** の正確な発音を聴きながら、同時に目でスペルを見ることができる。速度調節も容易である。自動でリズムカルに表示することもできるし、手動にして指導者のペースで読ませることもできる。

② 動画

米田(2013)は、次のように述べている。「デジタル教科書は紙では表現できない、音声や映像も表現が可能です。視聴することで生徒にとってはリアルな体験となり、内容に対する理解が一層深まります。」確かに単元に関係した動画を見せることができ、それは「生徒たちにとってはリアルな体験」である。

Wheelchair Basketball (車いすバスケットボール) の単元では、特別な車いすに乗ってプレイする様子の動画を見せた。体育館で実際に試合を観戦しているような臨場感があった。「特別な形をした車いす」と言われてもどんなものか想像もつかないが、デジタル教科書の動画を見れば、一瞬でわかる。下半身が不自由な選手たちがどのようにしてドリブルし、シュートするのか言葉ではとても伝えることはできないが、映像を見ることで 1 分もしないうちにははっきりと理解できる。また、その動画を見ているときは、生徒たちは画面に集中していた。

「今どきの子どもたちですから、ICT を使うとパッと目がいきます。」という T 中学校英語科 M 教諭の発言は印象的であった。幼いころから TV や DVD に慣れ親しんできた世代の生徒たちにとって、動画は、有効な教材提示手段である。

③ デジタルピクチャーカード

今まで大きなピクチャーカードを運んでいたが、これもスクリーンを使って提示できるようになった。登場人物の声も入っているため紙芝居を見ているような楽しさがある。

④ 文の発音練習

読むべきセンテンスの色が変わって表示されるため生徒にとってどこを読むかわかりやすい。生徒たちがスクリーンを見ながら読んでいる間に指導者は、生徒一人ひとりの様子を見て回ることができる。

2 デジタル教科書使用の課題

① 機器の移動と設置

設置に時間がかかることが最大の課題である。教室で使用する場合、パソコンを教室まで運び、電源を入れ、プロジェクターを接続し、スクリーンを準備する。生徒の机を移動させ、スクリーンの映り具合を確認し、傾きを調整する。大仕事である。ただでさえ10分の授業準備時間で教具を整え、教室を移動するのは大忙しである上にこの準備はかなりの負担になる。

② 生徒との距離感

T 中学校 M 教諭は次のように述べている。「スクリーンを使用することで生徒との距離が離れてしまうように思う。生徒との距離感を大切にしたい。生徒の中に入っての指導をしたい。(T 中学校研究協議会)」

確かに、紙のフラッシュカードであれば、指導者が、指でアルファベットを指しながら、「ここにアクセントね。」とか「この R の発音に注意。」といったように生徒の目の前で指導することができる。また、目の前でカードをフラッシュさせて、発音の確認や日本語から英語に直すといった練習をすることができる。スクリーンを使う場合は、機器の操作をするため指導者は、パソコンの横から動くことはできない。

③ デジタルとアナログとの融合

デジタル教科書の効用は多くあるが、課題もある。米田(2013)は、「デジタル教科書を取り入れたからといって、必ずしも学習がすべてデジタル化されるということではなく、アナログとの使い分けが重要なのです。」と結論付けている。

デジタルとアナログのそれぞれのメリットを活かし、授業に幅を持たせることが必要である。

3 F 中学校アンケート調査と結果

さて、授業を受けている生徒たちは、ICT の活用についてどのような意見を持っているのであろうか。ここでは、デジタルテキストについての調査結果について述べる。F 中学一年生においてアンケート調査を行った。

実施時期 2013 年 12 月
実施方法 選択式アンケートと記述式アンケート
対象生徒 F 中学校 1 年生 144 名

選択式アンケートの結果は、144 名中「とても良い」「どちらかというが良い」と肯定的な回答は、137 名で、「とても悪い」「どちらかというが悪い」と否定的な回答は、7 名であった。つまり 95% 以上の生徒たちが、デジタルテキストの使用に肯定的であるとわかった。「分かりやすい」「見やすい」という意見が多数あった。

A「デジタル教科書を使うことについてどう思いますか。」という質問に対して「とても良い」、「どちらかというが良い」と回答した生徒の意見

1 デジタル教科書の使用に肯定的な意見

- ・どこに線やマーカーをするか、聞きそびれたとき、プロジェクターを見たらわかったから。
- ・教科書よりわかりやすいから。
- ・分かりやすい。(多数)
- ・見やすい。(多数)
- ・教科書よりわかりやすいし、見やすいから。何もない時より、やりやすかったから。
- ・デジタル教科書を使うとき。周りが暗く、画面だけが明るい状況になるので注目しやすいから。
- ・単語発音がわかりやすい。
- ・写真が見やすい。
- ・見やすい、便利、画質が良い。
- ・とてもよくわかりやすいし、システムがすごく便利だと思ったから。
- ・写真を見ながら聞けるし、みんなと同じ画面を見られるので声をそろえやすいと思ったから。

- ・パソコンやプロジェクターを使うと見やすいし、デジタルテキストは、便利でいいと思う。
- ・単語の発音練習が何回もできて、良いと思う。
- ・デジタルの方が見やすいし、会話の場面を想像しやすいから。
- ・みんなが前を見て集中できるし、発音なども先生を見て、まねできるから。
- ・画面が大きくて見やすかったことと、英単語の読みがくり返し言えたこと。
- ・すごく分かりやすい。
- ・映像を使ったり、本物の外国人さんの声を聞いて授業することでもとても分かりやすかった。前に「ドカン。」と出てくるからみやすい。
- ・英語の単語を言った後、すぐに意味が出てくるから。
- ・教科書の中がとても分かりやすい。
- ・ちゃんとした発音がわかる。
- ・どのような状況でその英語を使うのかがより分かりやすくなったり、どのような感情のときに使うのかが分かるからです。
- ・わかりやすかった。(多数)
- ・とても見やすいしよく聞こえるのでいいと思いました。
- ・教科書そのままの写真や文字がでてくるし、線を引く場所もどこかわかりやすくなんとなく楽しい気もするから。
- ・単語などが特に覚えやすく重要な部分に色や線がぬってあるのもくっきりとした色で分かりやすいからとても良いと思いました。
- ・少し見にくいところもあるけど、文字も大きくうつったり、音が大きかったりするのでもとてもつかいやすく勉強もしやすいと思ったからです。
- ・いちいち黒板に書かなくていいし、リズムよく、どんどん言っていけるから。ちゃんとした(外国人)の声が聞けるから。
- ・大画面で授業をするのは、授業中に一体感が出ていて良いと思った。デジタル教科書によって、新出単語の発音も外人の人のが何度も聞けて良いと思った。
- ・動画も入っていて(School life in the USA のところ) 教科書の例文の情景がよく分かったから。
- ・絵があり、場面、が分かる。現在どの文を読んでいるか分かる。単語の発音がくり返し練習できる。
- ・単語が大きくうつし出されて見やすいし、発音の音声も聞

こえてすごく良いと思いました。

- ・目で見ると覚えやすく、ノートを見るよりいい。
- ・わかりやすくて、リピート読みとかしてくれるから。
- ・見やすい。発音がきれい。
- ・本文や単語を大きい画面で見ることができて見やすいから。
- ・ Words や本文がうつしだされるので、すごくわかりやすいから。
- ・読む場所がCDより分かるし、単語を見ながら言える。
- ・どこのことを説明しているのかわかるし、みやすい。単語も大きく書いてあるから覚えやすかった。
- ・発音が聞けるから。
- ・わかりやすいし、見やすいからいい。
- ・教科書より見やすいし。発音がわかりやすく聞きこえるからです。
- ・分かりやすいし、正確な発音が聞けて良いと思ったから。
- ・みんなが前を向いて集中できると思ったから。
- ・文字と発音が同時に聞けてわかりやすかった。CD ラジカセで聴くと、発音がめっちゃ分かりやすい。
- ・分かりやすくてとても良いから。
- ・とても見やすく、分かりやすく正しい発音や意味が分かるから。
- ・単語が覚えやすい。理解しやすい。
- ・わかりやすかった。
- ・発音が分かりやすいから。パソコンだと単語が出てきて、意味と一緒に覚えられるから。
- ・授業がやりやすいから。
- ・とっても分かりやすい。楽しい。
- ・スクリーンに映っているから、日本語の意味と発音の仕方がよく分かる。CD で流れている歌とかで高校入試のリスニングテストにまで役立つと思うから。
- ・うしろの席から見やすいし、その人物の動きがわかるから。
- ・ICT 機器には工夫が施されているのでみんなのやる気を出してくれるからです。
- ・自然と上を向いて話せるので、はっきりと（みんなの声が）聞こえる。
- ・ふつうに口で言われるよりも、絶対に分かりやすい。
- ・画面がでかくて見やすいから。
- ・正しい発音がよく分かり、まねをしようとするとき書くことだけでなく、英語としての技術が増えるから。先生の説明

がよく分かっていいなと思います。

- ・プロジェクターは大きくてみやすいし、リスニングなどにもやりやすかった。
- ・映像を見ながら音声も流れるから、分かりやすい。
- ・前を見て、楽しく覚えやすかった。見やすかった。
- ・分かりやすかったから。CDでの発音もしやすかった。
- ・CDラジカセの発音が聞きやすい。
- ・授業は、よくなったと思う。
- ・スピード良く授業ができた。
- ・見やすいし、説明していることがわかりやすいから。
- ・よく分かりやすいし、早く授業を進められると思うからです。
- ・分かりやすく表示してくれるから。

2 デジタル教科書の使用に否定的な意見

- ・見にくい。
- ・カーテンをしめて、電気を消しても光が入ってきてスクリーンが見にくい。けど、ホワイトボードに書くよりはいいと思う。
- ・はっきり見えるけど、たまにななめっていたりすると気になるから。
- ・ホワイトボードより大きいのでみやすいし、絵などカラーで教科書どおりでとてもわかりやすいんですけど、日光の関係によって写りがうすくなったりするのでもう少しははっきりうつるといいな、と思います。
- ・とてもわかりやすいけど、それを始めるのに、少し時間がかかってしまうので良くないと思います。
- ・スクリーンも大きくて見やすいのですが、前までは誰かが書くような形でやっていて「品詞」があったのでよかったです。品詞は、これであっているかな？と不安な時が多いので品詞があれば、・・・と思います。CDラジカセは音量もちょうど良く、聞きやすいです。
- ・光があたって見づらいときがある。
- ・全員にいつせいに見せることができるのはいいけれど、光の加減か少し見にくい時もあるから。
- ・電気がついていて明るいとプロジェクターが見えにくいです。パソコンから発音が聞こえる音量が小さいけど、先生が発音してくれるので、まだわかります。
- ・わかりやすいけど、うしろだと見にくい。

B「デジタル教科書を使うことについてどう思いますか。」という質問に対して

「とても悪い」、「どちらかというとも悪い」と回答した生徒の感想

- ・みんながふざけてうるさくなるから。
- ・K先生の授業では、プロジェクターをあまり使わなかったけど、S先生の授業では使っていたので少し混乱してしまった。でも、プロジェクターは、見やすかったし、分かりやすかった。
- ・プロジェクターやと見にくいし、教科書の方が見やすい。ラジカセは聞き取りやすいからOK。
- ・パソコンを使っているから聞こえにくい。
- ・目の悪い人にとっては不便だから。あといちいち前をむかわなければいけないから。
- ・色がうすくて、見にくい。
- ・CDラジカセは、わかりやすくていいけど、スクリーンを見ていると疲れるし頭が痛くなるからいやです。

否定的な意見は、「光があたって見づらいときがある」「カーテンを閉めて、電気を消しても光が入ってきてスクリーンが見にくい」というように内容ではなく、設備面の不十分さを指摘するものが多かった。電動式の暗幕があれば、「光」の問題は解決されると思われる。「パソコンから発音が聞こえる音量が小さい」という点については、器具をプラスすることで解決されると考えられる。

Ⅲ 英語教育における外国の ICT 活用

諸外国の ICT の導入は、どのようになっているのであろうか。2012 年夏、筆者は、イギリスの「英語教師のためのサマースクール」に参加した。第二外国語として英語を教える教師たちが集まって「教育方法」について学習した。その学校では、電子黒板を使った授業が行われていた。ロール式の電子黒板で教師は、授業のポイントを自由にスクリーンに書き込むことができていた。プロジェクターは、天井に設置されていた。動画は、色鮮やかに映し出され、内容の深化を促していた。学習者として、ICT を活用する授業を受けてみて、その効果に驚いた。また、指導者は、授業の途中で黒板を消す時間をとることなく、次々と指導を進めていける。授業の効率化がはかられていた。

中村伊知哉・石戸奈々子（2010）によると、「イギリスが世界をリードする形で教育改革を推進してきたことは確か」であるという。学校主導で ICT の導入がなされている。また、すべてのカリキュラムで ICT を活用した授業が行われているそう。また、中村・石戸(2010)は、次のようにも述べている。「イギリスは、いち早く ICT の重要性に気づき、国を挙げて取り組んできた。7 年生から 9 年生までは、週に 2 コマが ICT の習得に充てられている。日本の 6 年生に相当する 7 年生では、電子メールの使い方、パワー・ポイント、ワード、エクセル、インターネットなどを勉強する。学校では、学校専用のメール・サーバーを使い、入学と同時に全員にメール・アカウントが与えられる。」

F 中学校 ALT にインタビュー

日時 2013 年 12 月 12 日

P 先生は、F 中学校の ALT(Assistant English Teacher)である。3 年前から週一回 F 中学校で教えている。自宅で英語教室を経営しており、そこでは約 100 名の生徒たちが学んでいる。日本人女性と国際結婚し、2 人の子どもたちを育てながら働いている。オーストラリアでの教員歴が 10 年以上あり、優秀な ALT である。

ここでは、P 先生へのインタビューを通して、F 中学校での ICT 活用の現状と課題について明らかにしていきたい。

P 先生の ICT への考え

私は、とても重要であると考えている。そして、教育における次の大きな発展だね。たった今もコンピューターを使っているしね(と机上のパソコンを指した)。iPad や iPod を(自分の)子どもたちとともに使っている。私の子どもたちに英語を教えているんだ。

子どもたちは、(ICT 機器を使用して学習すると) 3 ～ 4 時間も学習のために座っていることができる。教室では、(そんなに長いあいだ座っていることは)できない。だから、私は、子どもたちにとってもたくさんの練習をさせている。成功しているよ。

ICT についてどう思うかという質問に対しては、即座に肯定的な答えが返ってきた。「It's very important and next big development in education.」と表現していた。確かに、「big

development」というにふさわしい進歩であると言える。ICT機器を活用して子どもたちに英語を個別に教えることについては、「successful」という表現をしている。

P先生のオーストラリアにおけるICT機器の使用状況と日本でのICT機器の使用状況

オーストラリアでは、いつも使っていた。全ての教室にコンピューターがあった。少なくとも5、6台はあったよ。全ての生徒に1台ずつも普通のことだった。パソコン室では、一人ひとりの生徒たちに一台のパソコンがあり、生徒たち自身で学習を進めていくプログラムもあった。また、パソコンを使うときには、助手の先生がいて、生徒たちをサポートしていた。

日本の学校では、(ICTを)ほとんど使っていない。写真を拡大したり、カードを使用したりしている。なぜなら、プロジェクターを運んだり、設置したりするのに10分もかかる。とても不便である。それにとときどきうまく作動しないこともある。授業を始める前にずいぶん時間がかかってしまう。紙のカードをラミネートしておけば、毎年使うことができ、便利だ。10年でも好きな時に使えるよ。ただし、保管場所が必要だけどね。私の引き出しは、カードでいっぱいだよ。

オーストラリアでは、とても恵まれた環境にあったことがわかった。一方、日本では、設備面の不十分さが障害となって、ICTを活用していないことがわかった。P先生の机中には、たくさんの美しい絵や写真、ビンゴカードが入っている。授業では、それを提示しながら、進めていた。クリスマス話題では、クリスマスツリーやサンタクロース、クリスマスリースといったクリスマスに特有のカラフルな絵とその下に英単語が印刷された大きな用紙をラミネートしていた。ICT機器の教室での使用について質問すると「It's very inconvenient. Sometimes it doesn't work.」とため息混じりに話していた。「inconvenient (不便な)」というのは、持ち歩くことについてのコメントであった。

持ち歩くのに「不便である」ことは、教師が次々と教室を移動しなくてはならない日本の中学校では、かなり大きな問題である。アメリカのように教師の部屋があって、そこに生徒が移動してくるのであれば、一度設置すれば何度でも使うことができる。しかし、日本の中学校では、10分の授業準備時間（休み時間）の間に教室から教室へと移動しなければな

らない。重たい複数の機器を持って移動し、その上、それらを設置するとなると大仕事である。パソコンとプロジェクターと教科書、出席表、プリントなどを持って教室に行き、スクリーンを設置し、機器の準備をするのは時間がかかる。また、ようやく設置してもパソコンがうまく作動しないこともある。スクリーンとプロジェクターの距離や傾きも調整が必要である。

それに比べると「カード」は、ずっと簡単に使うことができる。P 先生のようにラミネートしておけば何年も繰り返し使用することが可能である。その場合の問題点は、保管が煩雑になることである。ICT であれば、パソコンや USB に多くの画像を保存することができるし、整理も容易である。一時間の授業でも何枚もの絵やカードを使用するため、管理が大変である。

第二章では、そのような不十分な環境の中、どのような実践が可能かについて述べる。

第三節 「ICT を活用したプレゼンテーションによる英語教育～協同学習を活かした授業づくり」の今

2013 年秋、亀山市立亀山中学校、静岡大学教育学部附属島田中学校、三重大学教育学部附属中学校、筑波大学附属中学校の公開研究協議会に参加した。どの中学校もそれぞれに特色があり、歴史があり、独自のねらいを持って教育実践を行っている。どの学校も小集団での生徒の英語活動を行い、なんらかの ICT 機器を活用していた。生徒たちが生き生きと授業に取り組んでいる様子が印象的であった。それぞれの学校における教育実践について報告する。

第一項 K 中学校の取り組み

K 中学校では、前次研究（平成 22～23 年度）において「基礎学力の定着・向上をめざして」を目指した実践を行ってきた。今次研究においては、次のように各教科での実践に取り組んでいる。「グループ活動等を取り入れた授業展開を工夫することで、個の「学び」から協同的な「学び」をつくり出し、自らの「学び」が成立するように広く授業のあり方を検討していくことにする。（研究紀要 P.2）」「今次研究は、特に教科学習に重点を置き、生徒の「学ぶ姿」に着目し授業分析をおこない、授業改善をおこなっていくことで、学力の

向上をめざすものである。(研究紀要 p.2)」

英語公開授業を参観した。第2学年において実施され、指導者は、玉田 有香教諭であった。本時の目標は、S V O O 文型の give を用いた英作文を4人で完成させることであった。授業の導入では、単語の定着をねらって、単語プリントを使用した活動が行われた。テンポ良く次々と発音し、単元の単語を全て毎回授業の始めに行うということであった。指導者は、はっきりとしたクラスルームイングリッシュを駆使して、てきぱきと指示していたが、ついていけない生徒もいるようだった。指導者の後に続いて発音するのはできていたが、プリントを折りまげて、日本語を見ながら英語を言うのは難しいようだった。

ジャンプの課題は、S V O O 文型を使って絵の状況を英語で説明するという活動であった。教室に大画面TVがあり、指導者は、自作のパワーポイントを用いて文法導入を行っていた。指導者がデジカメで撮影した写真や「ちびまるこちゃん」「ワンピース」といった生徒たちに人気のテレビ番組を用いて、興味深い映像が大きな画面に提示された。画面の中に「現在形」「過去形」と時制については文字ではっきりと示されていた。

I C Tを活用して、指導者の作成した絵や写真を見ながら4人グループで8つの英作文を行う活動は、スムーズに行われていた。最後に黒板で英作文の確認を行った。アナログとデジタルを上手に組み合わせて、授業が進行していた。

協議会では、「生徒同士の学び合いは十分であったのか」と疑問の声があった。また、「指導者が同じ指示を5度も繰り返すのは、生徒の集中力を高めるのに弊害になるのではないか」という意見が出された。全体的には、よくまとまっていて、わかりやすい授業であった。

第二項 静岡大学教育学部附属島田中学校の取り組み

島田中学校では、教科書の他に独自の教材を用いての「くさび単元」を設定し取り組みを継続している。ICTを活用した授業に力を入れておりすべての班に iPad が支給されていた。生徒たちは、IC レコーダーを用いて自分の声を録音していた。研究授業の後、静岡大学の先生による「ICT活用講座」が開かれ、教室でのICT機器の活用について講義された。

① 3年生の授業

3年生では、単元名を「I LOVE FUZOKU」として、S

中学校の紹介 DVD を作成する全 10 時間の「くさび単元」であった。実際に使える英語を目指して、自作ポスターや Picture book、写真など、生徒自身が決めたプレゼン手段を用いて show & tell 形式で、附属島田中学校ならではの行事や生活の魅力について紹介する活動を行っていた。公開研究会当日の授業は 2 つの「小集団（4 人班）をセットにして、お互いにプレゼンを見せ合い、アドバイスし合う」という活動が取り入れられていた。下の図の様に 1 班の生徒と 2 班の生徒が向かい合って座り、お互いに自分のプレゼンを見せ合っていた。

1 班 発表者 A	1 班 発表者 B	1 班 発表者 C	1 班 発表者 D
2 班 iPad 撮影者	2 班 質問者	2 班 質問者	2 班 質問者

1 班の生徒たちのプレゼンが終了すると 2 班の生徒たちは、英語で考えを述べていた。ICT の活用としては、iPad でプレゼンを録画し、voice recorder で録音し、振り返りをしていった。全 10 時間のこの単元では、3 度の小集団によるプレゼンを行った後、DVD を作成する。

② 2 年生の授業

2 年生では、単元名を「I want to say “Thank you” to you!」として、「自分の大切な人、感謝している人を紹介する」という活動を行っていた。小集団内の役割分担を①発表者、②監督 + iPad 撮影者 + アドバイザー、③リスナー 1、④リスナー 2 とし、発表後にアドバイザーが発表者、リスナーにアドバイスを行っていた。まず、指導者が自分の大切な人（母の Yoshiko さん！）について画用紙を用いて発表した。画用紙には手書きの文字や写真があり、一つの作品として美しく仕上がっていた。次に生徒たちが 4 人班になって班の中で発表した。4 人にはそれぞれの役割があり、Speaker, Lisner①、Listener②、監督を担当する。

Speaker	監督 (iPad)
Listener①	Listener②

Speaker が自作の画用紙を見せながら、発表するのだが、その際、途中で Listener たちは、英語で質問したり、あいつ

ちをうったりと反応を返していた。監督は、iPad で撮影し、発表後英語でコメントをしていた。

第三項 F 中学校の取り組みなど

F 中学校の 3 年生では、世界の家や食べ物について実物投影機での 4 人班によるプレゼン発表が行われた。発表の後には聞いていた生徒から発表者への質問が英語でなされていた。原稿は、インターネットを活用し、それぞれの生徒たちが熱心に調べ学習をした様子がわかった。

その他、筑波大学附属中学校 2 年生の授業において、4 人グループを活用した実践が行われていた。まず、指導者から「今日のお題」が発表される。それについて、ペアで英語を用いての会話が行われた。その後、4 人グループになり、ペアで聞き取った内容について、相手のグループに発表する。

① ペアでの活動 英問英答により、相手の情報を聞く。

生徒 A	生徒 B
------	------

② 4 人グループでの活動 聞き取った内容について伝える。

生徒 A	生徒 B
生徒 C	生徒 D

生徒 A は、生徒 B から聞き取った内容を生徒 C と生徒 D に伝える。生徒 B は、生徒 A から聞き取った内容を生徒 C と生徒 D に伝える。同様に生徒 C，D は、聞き取った内容を伝える。

どの中学校も教師からの教え込む学習ではなく、生徒たちの主体性を尊重した授業を行っていた。英語を話す生徒たちの楽しそうな表情が印象的であった。また、「協同学習」を研究目標として掲げてはいないにもかかわらず、「協同学習」の要素がどの授業にも取り入れられていることがわかった。

【引用・参考文献】

- ・ 江利川春雄 編著 (2012)
『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館書店
- ・ 安永 悟(2005)「協同と教育 第一号」日本協同教育学会
pp.6-16
- ・ 亙理洋一(2012)「英語教育研究における協同学習の現状」
- ・ 金田一京助・金田一春彦・見坊豪紀・柴田 武・山田忠雄
(1978)『新明解国語辞典』 p.273
- ・ 神戸大学住吉中学校、神戸大学附属中等教育学校 (2009)
『生徒と創る協同学習』明治図書 p.200
- ・ 日本協同教育学会 (2013)『協同学習法ワークショップ 一
日研修』理論編2 JASCE 日本協同教育学会
- ・ 杉江修治(2011)『協同学習入門』 ナカニシヤ出版 pp.30-33
- ・ D.W.ジョンソン, R.T.ジョンソン, E.J.ホルベック(1998)
『学習の輪 アメリカの協同学習入門』 pp.20-22
二弊社
- ・ 神戸大学附属住吉中学校 神戸大学附属中等教育学校
(2009)『生徒と創る協同学習』 pp.12-13 明治図書
- ・ 佐藤 学 (1999)『教育改革をデザインする』 pp.97-111
岩波書店
- ・ 柴田 好章 (2011)「学校教育の情報化の動向—ICT の活用
を中心に」日本教育方法学会編『デジタルメディア時代の
教育方法』図書文化社, pp.142-153
- ・ 広瀬 一弥 (2012)『小学校 ICT 活用の現状 指導者が使
う活用から学習者が使う活用へ』
「英語教育 The English Teachers' Magazine March
Vol.60 No.13」大修館書店
- ・ 中村伊知哉・石戸奈々子 (2010)「第2章 世界はもうこ
こまで進んでいる 学校主導型のイギリス」
『デジタル教科書革命』ソフトバンク クリエイティブ
株式会社, pp.97-101
- ・ 吉田広毅「ICT 活用英語教育のいま」
『英語教育』*The English Teacher's Magazine* 3月号
[特集] これからの ICT 活用教育 大修館書店 2012年
- ・ 亀山市立亀山中学校
『 亀山市立亀山中学校 研究紀要』 2013.10.23
「生き生きと学び、活動できる生徒の育成～ともに学
び合う授業の創造」

- ・ 静岡大学附属島田中学校
『静岡大学附属島田中学校 研究紀要』
「主体性を高める授業過程」』 2013.11
- ・ 三重大学教育学部附属中学校
『三重大学教育学部附属中学校 中間公開研究会
研究レポート・指導案集』
研究テーマ
ともに学びともに高めあう学校の創造
～未来を創る「人間力」をもつ生徒の育成～」』
2013.11
- ・ 筑波大学附属中学校
『筑波大学附属中学校 研究協議会発表要項』
2013.11

第二章 F 中学校における実験授業と分析

この章では、現代の子どもたちの英語学習に対する意識、F 中学校における実験授業の内容とアンケート調査結果、インタビューの結果から、生徒たちの意識の変化を明らかにし、仮説の検証を行う。

第一節 子どもたちの英語の学習に対する意識

現代の子どもたちは、英語の学習についてどのように感じているのであろうか。平成 25 年 8 月 27 日、平成 25 年度全国学力・学習状況調査の結果（平成 25 年 4 月 24 日実施）が公表された。この調査は、国語、算数・数学の 2 教科で、小学校第 6 学年及び中学校第 3 学年の全児童生徒を対象とした 4 年ぶりのものであった。その中の質問紙調査において、「英語の学習は好きですか」という項目がある。全国の公立小学校の児童は、次のように回答している。「そう思う」は、41.5%、「どちらかといえば、そう思う」は、34.7%となり、合計すると 76.2%の児童が英語の学習に対して好感を持っていることがわかる。同じ質問に対して、三重県の公立小学校の児童は、次のように回答している。「そう思う」は、40.4%、「どちらかといえば、そう思う」は、34%となり、合計すると 74.4%の児童が英語に対して好感をもっていることがわかる。全国も三重県もほぼ 4 人に 3 人は、英語学習に対して好意的であると言える。しかしながら、ほぼ 4 人に 1 人は、中学校の入学時点で英語学習には、否定的なイメージを持っているという結果となっている。

ベネッセ教育総合研究所が 2009 年 1 月～2 月に全国の中学 2 年生（有効回答数 2,927 名）を対象にアンケート調査を実施した。「中学校での英語学習」に関する調査では、『英語を苦手と感じている中学生は、約 6 割であり、そのうち 8 割弱が、「中一の後半」までに英語を「苦手」と感じている。』という結果が出ている。

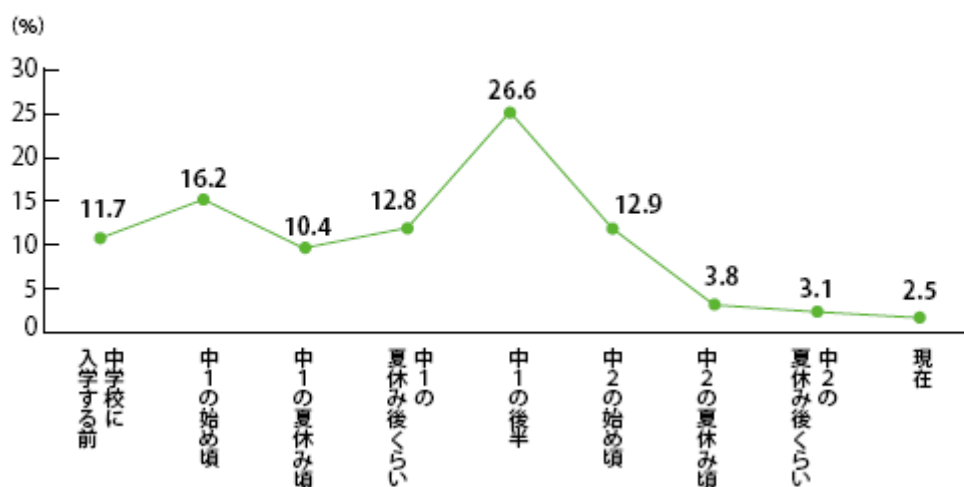
Q. あなたは英語が得意ですか、苦手ですか。

図2-3 英語の得意・苦手



Q. あなたが、英語を苦手と感じるようになったのはいつ頃からですか。

図2-4 英語を苦手と感じるようになった時期



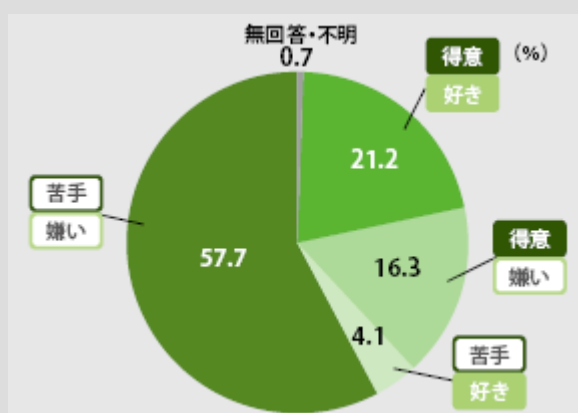
※「現在」は、本調査を実施した1～2月（中2の後半）を示す。

※英語の「得意・苦手」について「やや苦手」「とても苦手」と回答した1,833名のみを対象。

※「無回答・不明」は省略。

【図2-5: 英語に対する認識】

「得意」「苦手」、「好き」「嫌い」をもとに、英語に対する認識の4タイプを作成した。詳細は以下の通りである。「あなたは英語が得意ですか、苦手ですか」という質問（図2-3）で「とても得意」「やや得意」を選択した場合



を「得意」とし、「やや苦手」「とても苦手」を選択した場合を「苦手」としている。「あなたは、どの教科が好きですか」という質問（[図2-8](#)）で、「英語」を選択した場合を「好き」、選択しなかった場合を「嫌い」としている。「嫌い」と回答しているわけではないが、ここではわかりやすさを考慮して、「嫌い」と表記している。

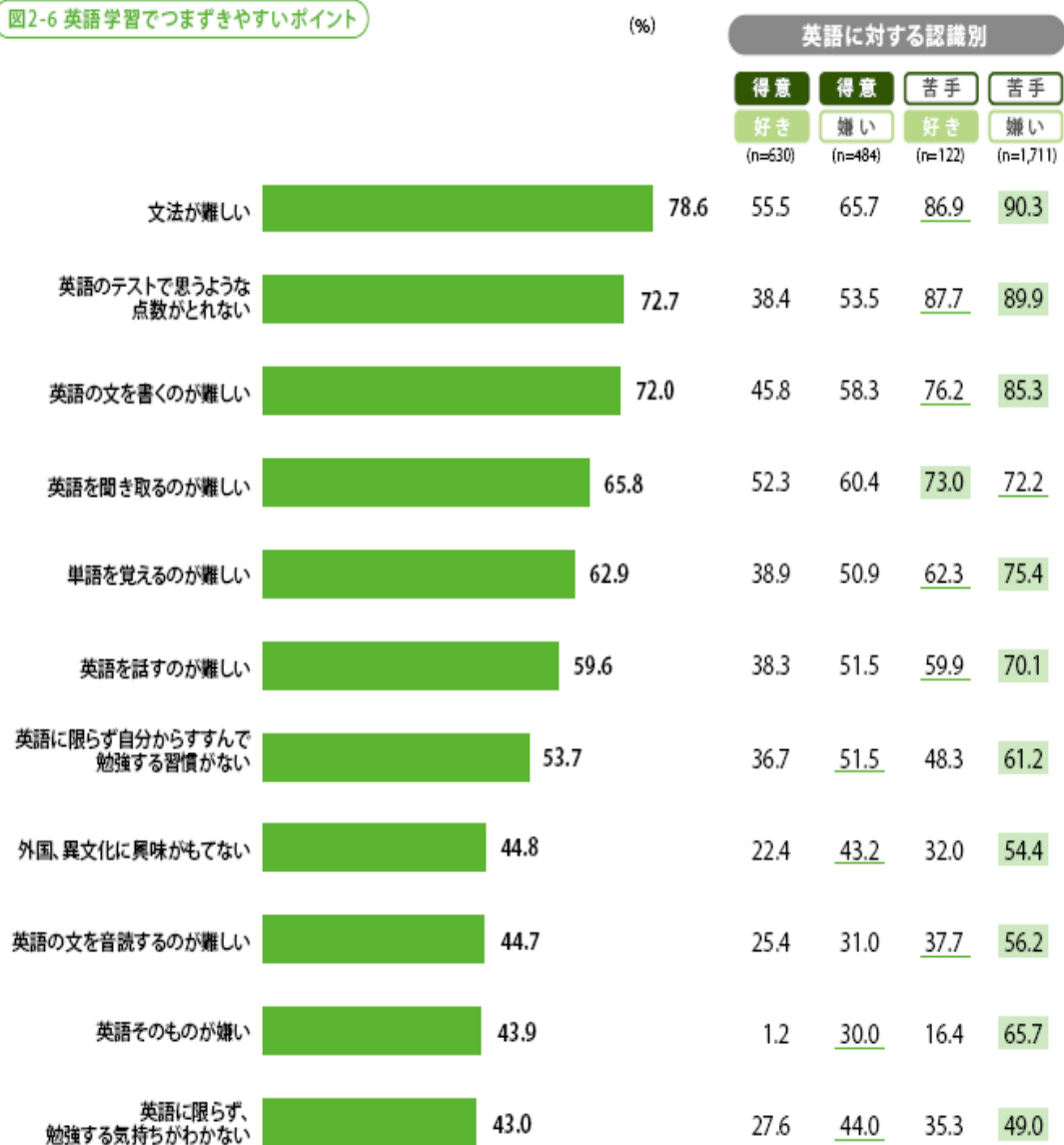
英語の得意・苦手についてたずねたところ、英語を「得意（とても＋やや）」という回答は約4割であるのに対し、「苦手（とても＋やや）」という回答は6割と、「苦手」が「得意」を大きく上回る。さらに、「苦手」と感じるようになった時期は、「中1の後半」がもっとも高く、全体では「中1の後半」までに8割弱が苦手と感じている。なお、「得意・苦手」「好き・嫌い」によって英語に対する認識をタイプ分けすると、「苦手・嫌い」の中学生が6割弱を占める。英語学習でつまずきやすいポイントについては、『「文法が難しい」と感じている中学生が約8割。「英語のテストで思うような点数がとれない」「英語の文を書くのが難しい」と感じている中学生もそれぞれ7割を超える。』という結果になっている。

この結果から、中学生の英語嫌いは、深刻であると言える。学習が進むにつれて、知識が増え、英語での表現力も増していく。新しい世界の扉を開けた子どもたちが、学ぶことに喜びを見出してほしい。英語嫌いが多いとはいえ、全員が嫌いなわけではなく、好きな生徒たちも多数いる。

では、なぜ生徒たちは英語学習につまずきを感じるのだろうか。ベネッセ教育総合研究所の調査から、次のようなグラフが出ている。

※「とてもあてはまる」＋「まああてはまる」の％。
 ※緑の囲み部分は認識別の中での最大値。下線は２番目の値。
 英語の学習の苦手意識やつまずきについてたずねたところ、「文法が難しい」「英語のテストで思うような点数がとれない」「英語の文を書くのが難しい」と感じている割合がいずれも７割以上と高い。英語に対する認識別にみると、「苦手・嫌い」の生徒は全体的に肯定率が高い。また、「得意・嫌い」の生徒は、「英語に限らず自分からすすんで勉強する習慣がない」「英語に限らず、勉強する気持ちがわかない」など学習全般に関わる項目で若干数値が高い

図2-6 英語学習でつまずきやすいポイント



このような生徒たちの現状がある中で、どのような授業を行えば、英語嫌いをある程度防ぐことができるのであろうか。少しでも英語学習に対して、「好き」「得意」といった意識を持つ生徒を育てるには、どのような取り組みが考えられるだろうか。

2つの実験授業とその結果について、次に述べる。

第二節 実験授業Ⅰ 名刺交換

ここでは、F中学校における実験授業Ⅰの内容と授業に対するアンケート結果から生徒たちの英語学習に対する意識の変明らかにしていく。また、F中学校での実験授業を行うに先立って、大学生を対象とした模擬授業を実施した。筆者の所属する授業論研究室では、年に2回、3日間の研究合宿を行っている。2013年3月に実施された時には、大学三年生から大学院まで20名の参加があった。その際の感想を拾い上げながら、「名刺交換」の持つ課題と到達点について検討する。

第一項 名刺交換

2013年5月に「英語の名刺交換」という実験授業を行った。(授業は、B組、C組、D組では、筆者とA教諭が行い、A組については、A教諭とB教諭が行った。)中学校に入学して、約一か月が経ち、英語の授業では、be動詞を学習した。自己紹介を通して、クラスの仲間との交流を深めるとともに4人班での協同学習を取り入れた。また、指導者自身が、自己紹介のデモンストレーションを行い、生徒たちの興味関心を促すよう努めた。この実験授業のねらいは、「クラスメートと英語を用いて、コミュニケーション活動を行うこと」、「be動詞を用いて、自己紹介を何度も行うことにより、英語を使う楽しさを実感すること」である。実施内容は、以下のようである。

〈名刺交換 初めての自己紹介〉

対象学年 : 中学一年生 144名
(1クラス36名 A組、B組、C組、D組)

実施時間 : 1 年 A 組 2013 年 5 月 8 日 4 限目
 1 年 B 組 2013 年 5 月 7 日 5 限目
 1 年 C 組 2013 年 5 月 7 日 2 限目
 1 年 D 組 2013 年 5 月 7 日 4 限目

実施場所 : F 中学校 各教室

授業の流れ

A インプット

I Listen

- ① 指導者が英語で自己紹介を行う。
- ② 内容について、質疑応答を行う。

II Repetition Practice 発音練習

- ③ 指導者の後について発音練習をする。
- ④ 大きな声で元気よく発音するよう促し、再度発音練習をする。
- ⑤ 指導者は、自分の自己紹介を行い、その後について、生徒たちは自分自身のことについて言う。

III 一人の時間

- ⑥ 名刺カードを配付する。
- ⑦ 名刺カードを書く。(一人 5 枚ずつ)
- ⑧ 自分の名前をローマ字で書き、何か絵を入れる。できる人は、色も使ってきれいに仕上げる。(制限時間は、5 分)
- ⑨ デモンストレーションを生徒と指導者で行う。
- ⑩ 最初、じゃんけんをし、勝った人から始める。
- ⑪ 次に負けた人が言う。

B アウトプット 自分のことを話す。

- ⑫ ペアで練習する。
 - ⑬ 隣の人と練習する。
 - ⑭ 前の人と練習する。
- 最後にこの部屋の中にいる人と相手をみつけて名刺交換をしながら自己紹介をする。
 (参観授業では 1 枚を、大人の人にわたすよう指示した。)
 (制限時間は、7 分) 途中で「One minute. あと一分です。」と声をかける。
- ⑮ 時間になったら座るよう指示する。

〈活動中の生徒たちの様子〉

授業中の生徒たちは、興味を持ってこの活動に参加していた。最初は、少し自信なさそうな様子の生徒たちも、何度も相手を変えて同じ英文を言う間にだんだんスムーズに言えるようになっていく様子であった。また、どのクラスも雰囲気良く、全員が活動に参加し、孤立している生徒はいなかった。

〈実験授業「名刺交換」に対するアンケート結果〉

授業後の「名刺交換」に対するアンケートは次のようであった。

	A	B	C	D
とても楽しかった	2 6	1 4	1 3	1 9
楽しかった	1 0	2 2	2 3	1 7
楽しくなかった	0	0	0	0
全然楽しくなかった	0	0	0	0

教室の中には、学習に対して積極的な生徒もいれば、学習それ自体が苦手な生徒もいる。人と会話することが好きな生徒もいれば、日本語ですら会話することは苦手な生徒もいる。だから、数人の生徒にとっては、この活動は苦痛かもしれないと予想していたのであるが、驚いたことに「楽しくなかった」「全然楽しくなかった」と回答した生徒は一人もいなかった。

「とても楽しかった」「楽しかった」を含むと 100 パーセントの生徒たちが英語での名刺交換に楽しさを感じたという結果であった。このことから、「生徒たちは、英語を使うことに楽しさを感じる」という仮説は実証されたとと言える。

入学時のアンケートで「(英語が)とても嫌い」と答えたのは、I さん、J さん、S さんの 3 人である。3 人はこの活動についてどのような感想をもったのであろうか。まず、C 組の I さんは、第一回目のアンケートでは、「(英語が)とても苦手」と回答し、「英語がすごく嫌いなので好きになれればうれしいです」と希望を書いていた。今回の活動については、「楽しかった」と回答し、「たくさんの人と名刺交換ができてよかった。おもしろい名刺があってよかった」と英語以外の要素についても興味を示している。また、D 組の J さんも一

回目のアンケートでは、「(英語が) とても苦手」と回答し、「単語を覚えるのが苦手なので、効率のいい覚え方を教えてください」とメッセージを書いていた。今回のアンケートでは、「とても楽しかった」と回答し、「しゃべったりするのがとても楽しかった」と感想を書いている。同じく D 組の S さんも「とても楽しかった」と回答している。「テニス部なのにサッカーが好きと答えたり、紙に書いてない表現をするのが楽しかった。名刺にかいてある絵がおもしろかった」と感想を書いている。

学力の高い H さんは、「とても楽しかった」と回答している。「自分が好きな物を英語で伝えられて楽しかった。あと、みんなが好きなものも英語でわかって良かった」と感想を書いている。また、英子さんも「とても楽しかった」と回答し、「同じ物好きの仲間がいてとてもうれしいです。日本語でも英語でも他の言葉でもうれしいのはやっぱり同じなんですね。英語は中でも国際的に通じるので、みんながうれしくなれる確率が高い言葉だと思います」と感想を書いている。Y さんは、「楽しかった」と回答するとともに「単語と単語の間を切って離している子もいたから、文を一つで読めるようにしていけたらいいと思います。(例) I / like / . . . → I like . . . 」と感想を書いている。

また、B 組においては、授業参観であったため、保護者アンケートも行った。保護者の意見は次のようであった。「前回の授業では、まだ授業に慣れていないようで顔もひきつっていましたが、今回の英語はリラックスしていました。皆集中していて素晴らしいと思いました。自己紹介では楽しみながら名刺をわたす事ができていたので良かったと思います」「とても丁寧なわかりやすい授業だったと思います」「子供が声を出す授業がとても良いと思います。先生 2 人がとても進行・表情・声かけが良かったです」「一限まるまる座って聞いている授業より動くことがあって楽しくできているように思いました。我が子は英語の経験がなく、すごく不安でしたが本人も少しはついていけているのかな、とも思いました」「英語を親しみやすく、楽しくなるような授業でした」「こういう活動を通して英語が身近に感じてくれるとうれしいです。まさか私まで参加するとは思いませんでしたが、楽しかったです。まだまだ英語は始まったばかりですが、苦手意識をもたずに英語になじんでいってくれれば、と思います。今日はありがとうございました」

さて、実験授業を中学校で行うに先立ち、研究室の大学生

および卒業生を対象に名刺交換模擬授業をおこなった。模擬授業への生徒役としての参加者は、19名であった。アンケート結果は、次のようになった。「活動は楽しかったですか？」に対して「A とても楽しかった」と答えた学生は、15人(78.9%)。「B 楽しかった」と答えた学生は、4人(21.1%)。「C 楽しくなかった」「D 全然楽しくなかった」と答えた学生は、0人であった。また、「英語がわかりましたか？」に対しては、「A よくわかった」10人(52.6%)、「B わかった」8人(ふつうと答えた1人を含む)(42.1%)、「C わからなかった」1人(5.3%)「D 全然わからなかった」0人、という結果となった。

このことから、この2つの活動は、参加者にとって、「楽しかった」ということが言える。しかしながら、「英語の理解」という点からは、もう少し工夫する必要がある。

名刺交換にプラスの評価をした意見(下線部 筆者 加筆)

「I really enjoyed myself in this class. I thought everything went well. I felt as if I were a junior high school student.」

「とても楽しい活動に参加させていただいて、ありがとうございました。教科書にのっている文章より、先生の実際の体験を聞きながら、英文を作るのはとてもよかったです」「リスニングは、とってもよくわかりました。前に写真があったのでイメージができやすかったです」「名刺を自分で作るのが授業の一つの楽しみだと思います」「名刺交換。絵を描いたり、相手を換えたりして、いろいろな活動ができて楽しかったし、繰り返しがあるので覚えられますと思います」「名刺交換がもっといろいろな人のが欲しいと思えるので、意欲的に取り組むことができ、とても楽しかったです」「楽しみながら、英語を使ってしゃべったり、書いたりすることができた」「中学校の時の英語の先生は、発音があまり上手ではなく、リスニングも楽しくなかったのですが、きちんとした発音の英語を聞くことができると『本物に触れている』と感ずることができて、「勉強したい。」という気が起こりました。名刺交換も、イラスト入り OK など、楽しかったです」

名刺交換に対してプラスの評価をしている学生たちは、英語を使うことと同時に絵を書いたり、目の前にいる指導者の実際の体験を聞くことにも興味を持ったことがわかる。「わからなかった」と回答した学生の感想では、「あまりわからなかったけど楽しかった。本当に英語を勉強しようと思いました。」

とあり、「学ぶ意欲を喚起する」という大きなねらいは、達成されたと思われる。「パワーポイントを使うことで、見やすく、黒板よりカラフルでよかったです。」という意見もあった。

「名刺交換」の改善点を指摘する感想（下線部 筆者 加筆）

「好きなことを紹介する際の例文をもっとたくさんだしてもらえると嬉しかったです」「あまり課題に対してグループの必然性を感じられなかった。話す行為が大事なのか。単語がわからない場合、話し合いの進めようがなかった」「リスニングの写真を見せるとき、問題が手元にあるとリスニングを解いてしまうな、と感じました」「『なんて？』で相手にきけると深まるな、と感じました」

「好きな人に渡すということなのですが、交換してくれる人がいなかったら、悲しい思いをするかもしれない、と思いました」「自己紹介で何を言えばよかったか忘れてしまったので、Power Point で例文を写してほしいです。・・・先生のスピーチをもっと聞きたいと思います。最後に通して発表してほしいかったです」（下線部 筆者加筆）

教室を歩き回って、相手を見つけて会話を交わすのは、生徒たちにとって楽しい時間である。しかしながら、改善点を指摘する感想に書かれているようにクラスの状況によっては、「交換してくれる人」がいない生徒もあるかもしれない。今回は、スムーズに活動が進行したが、生徒たちの様子を見ながら、臨機応変に対応する必要があると考えている。

第二項 Show and Tell

ここでは、実験授業 Show and Tell の内容とその後のアンケート調査について述べ、生徒たちの英語に対する意識の変化を明らかにしていく。

F 中学校では、1 年生英語科において少人数教育を実施しているため、クラスを前半と後半に分けて、教室と国際理解教室で授業を行っている。前半は、生活班の 1 班から 4 班で 16 名（4 人×4 班）、後半は、5 班から 9 班の 20 名（4 人×5 班）での授業である。

対象学年 : 中学一年生 144 名

実施時間 : 1 年 A 組 前半 2013 年 7 月 9 日 1 限目
後半 2013 年 7 月 8 日 5 限目

1 年 B 組	前半	2013 年 7 月 9 日	2 限目
	後半	2013 年 7 月 8 日	4 限目
1 年 C 組	前半	2013 年 7 月 9 日	3 限目
	後半	2013 年 7 月 8 日	1 限目
1 年 D 組	前半	2013 年 7 月 9 日	5 限目
	後半	2013 年 7 月 8 日	3 限目

実施場所 : F 中学校 国際理解教室

I 実験授業「Show and Tell」

(1) 実験授業内容

Lesson 4 においては、複数形を学ぶ。Lesson 4 のタイトルは、校外学習 (Field Trip) であり、GET Part1 において登場人物 2 人が食材を買いに行く場面である。まず、教科書の新出単語、本文を学んだ後、Show and Tell を行った。

まず、個人練習をした後、4 人班の中でカードを用いて活動し、最後にパワーポイントを活用して全員が班毎に教室の前で発表した。この授業については、F 中学校での授業公開を行った。

以下は、今回の実験授業の指導案である。

第 1 学年 B 組 英語科学習指導案

指導者 坂倉 好子

日 時 2013 年 7 月 9 日 (火) 2 限目

場 所 国際理解教室

1 単元名 (教材名) Lesson 4 Field Trip
(*New Crown English Series New Edition 1* - Lesson 4 Field Trip)

2 「人間力」との関わり

・グループ活動を通じて、相手の気持ちを考えながら活動することができる。

・仲間と協力し合いながら、発表することができる。

3 指導について

(どこに、なぜこだわっているのか、それにどのようにアプローチしようとしているのか)

4 月に入学して以来、生徒たちは、多くの日本語と英語の違いについて学んできた。語彙においては、有声音と無声音、

イントネーション、文法事項では、語順の違いがある。協同学習よる生徒相互の関わりである。Student Team Learning（生徒チーム学習）における STAD（Student Team Achievement Divisions）の一部を取り入れる。STADでは、まず、教師が主に一斉指導の形で学習内容に関する情報、を伝え、その後生徒は集団内異質、集団間等質の4～5人集団に分けられる。各生徒は集団内の中で学び行い合いを行い、学習内容の習得を図る。

本単元においては、名詞の複数形について学ぶ。School Trip（校外学習）を題材とし、登場人物が、食材を持ち寄る場面を学んだ後、Show and Tellによって4人班で発表する。パワーポイントを活用することで各生徒の活動の幅が広がることを目指していきたいと考えている。

4 本時の目標

- ・新出単語・本文について、正しく発音し、意味を理解することができる。
- ・4人班で役割を分担し、パワーポイントを活用してスキットを発表することができる。

5 本時の指導過程

○教科での「人間力」の高まりに関するアプローチ

●他者とのつながりあう力の高まりに関するアプローチ

指導過程（45分）

区分	学習活動	時間	ねらいと留意点
導入	1.挨拶をする。 S: Stand up, please. T: Good morning, everyone. S: Good morning, Ms Sakakura. T: How are you. S: I'm good .(happy, hungry, sleepy...) And you? T: I'm good. (happy, hungry, sleepy...)	1分	○●全員起立して、指導者の方をむいて挨拶するよう促す。 ○●生徒それぞれが今の気持ちにあった答えをさせる。
展開	Thank you. Sit down, please.	6分	○●全員が起立していることを確認し、大きな声ではっきりと挨拶させる。 複数形の語尾についての無

ま と め	<p>1. 新出単語について学ぶ。 C D の後に続いて発音練習をする。 パワーポイントを見ながら指導者の後について発音する。 意味について学ぶ。</p>	7分	<p>声音・有声音の発音を何度も練習させる。 onions potatoes carrots</p>
	<p>○●ペアで練習する。 2. 本文について学ぶ。 C D の後について全員でリピートする。 C D のあとについて全員でシャドイングする。 指導者の後に続いて Read and Look up を行う。 本文の内容について確認する。</p>	15分	<p>○自分が声に出して発音するときは、文字をみないでリピートするよう促す。</p> <p>○●発表をするときの工夫を確認する。 (リズム、強勢、イントネーション)</p>
	<p>3. Show and Tell の準備を行う。 ・説明を聞く。 ・指導者の後に続いて発音練習を行う。 ○●班で話し合い「Show and Tell」の役割を決める。</p>	10分	<p>●英語がスムーズでない生徒には、助言を与える。</p> <p>○●4人がスムーズに役割を果たしながら発表できるよう助言する。</p> <p>●発表の工夫点を確認する。</p>
	<p>・個人練習を行う。 ○●4人班での練習を行う。</p>	4分	
	<p>○●発表ポイントの確認をする。 4. ○●パワーポイントを用いて各班毎に発表する。 5. アンケートに記入する</p>		<p>○次時の内容について確認する。</p>

	6. 挨拶をする。 That's all for today. Good-bye, everyone. Good-bye, Ms Sakakura.		
--	--	--	--

(2) Show and Tell の内容

「Show and Tell～4 人班で発表しよう！」をタイトルとして A～D で複数形を含んだスキットを 4 人で発表した。

A : I have three onions.

B : I have three carrots.

C : I have some potatoes.

D : OK. That's enough. I have a shopping bag.



A, B, C : Good. (声をそろえて大きく)

①～③の手順で練習を行い、最後に④の 3 つのねらいを持ってみんなの前で発表した。

① 役割を決めよう。自分の役割 ()

② 個人練習 自分のセリフが言えたら星に色をぬろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

③ 4 人で練習しよう。4 人全員が言えたら星に色をぬろう。

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

④みんなの前で発表しよう！

Speak loudly. 大きな声で発表しよう。

English pronunciation すらすらと英語らしい発音をしよう。

Eye contact みんなの方を見て発表しよう！





(3) 成果と課題

ICT 機器（プロジェクター・パソコン・スクリーン・CD プレーヤー・教材 CD）の活用によって、生徒の興味を引くことができた。教材を提示する段階でパワーポイントを用いたことにより、生徒が顔を上げてしっかりと発音できていた。パワーポイント上の絵や写真から各グループにカードを作成し、全員にそれぞれのカードを配布することにより、4 人グループ内での活動を円滑に進めることができた。実際にカードを持って「I have・・・」と言うことにより、実際の会話に近い形で活動を行うことができていた。

個人練習を行ってから、グループ練習を十分に行った結果、最初は戸惑っていた生徒も全員が前にでて、発表することができた。協力し合って、スキットを練習することができた。ねらいは達成できたと言える。

課題としては、決まったセリフを発表するだけでは面白味にかけ、単調であった。次回は、もっと生徒たちそれぞれの持ち味が発揮できるような課題を与える必要がある。

II 実験授業「Show and Tell」に対する生徒たちの感想

実際に授業を受けた生徒たちは、どのような感想を持ったのであろうか。「Show and Tell についての感想」についての記述式アンケートに対する回答は、以下のものであった。

II 実験授業「Show and Tell」に対する生徒たちの感想（下線部 筆者 加筆）

- ・ みんなの前に出て英語で発表するのは楽しかったです。これからは、もっと長い文を発表したいです。
- ・ 僕は、英語をしゃべるのが苦手で自分から取り組もうとすることはほとんどないけど、今回は一生懸命にできてよかったです。
- ・ 英語で発表するのは難しいけど、英語らしく言えて楽しかった。グッドのところをみんなで合わせて言えて楽しかった。他の班の人も発音のしかたがうまくていいと思った。
- ・ すごくわかりやすかったです。でも、だいぶ難しかった

です。おもしろいところやなやんだところもすごくあったけれどすごく楽しかったです。

・緊張したけど、上手に言えたと思う。スクリーンがあった方が見やすいし、何を説明しているかわかるのであった方がうれしい。個人で練習するのは役に立った。

・相手の発音の仕方を見て学ぶことができた。

・最初は、緊張したけど、何度も練習したら慣れてよかった。大きい声を出すことを意識した。

・スクリーンが大きく、見やすい。みんなで言うのは楽しい。

・前で発表するのは、楽しかった。発音をきれいにするように舌の動きも気をつけたので、これからも意識をしていきたい。

・班で言うのは楽しかったけど緊張した。それと声が小さかったのもうちょっと大きい声で次はしたい。

・わかりやすく、写真や絵もきれいで図も大きくて、とてもわかりやすかったです。

・前に出て発表するのは、少しはづかしかった。けど、練習の時に声がそろわなかった「Good」がそろったので嬉しかった。みんなに伝えるというのは難しかったけど、楽しかった。もし、また前で発表するときがあれば、今日よりもっとハキハキ言えるようになりたい。

・班の中では恥ずかしがらずにしゃべれたけど、人前に出て言葉を言うのでは少し緊張した。スクリーンは、大きい画面でとても見やすくてわかりやすかった。「Show and Tell」であまりうまく紙を見せる事ができなかった。

・見て、学んで、それをみんなの前で発表すると言うことは、すごくおもしろかったです。

・見せながら話すのは難しかったけど、自分の言葉を相手に伝えられたと思う。

・スクリーンで単語を絵と一緒に見ると覚えられて、とてもわかりやすい、意味もわかる。

・最初は少し緊張したけど、前に出たらそんなに緊張しませんでした。見せながら話すのは、もう少し大げさにやった方が良かったと思いました。スクリーンは、大きいのでとても見やすかったです。

・役を決めて、自分の役をしっかりと行うことができた。

・実際に前に出てやって周りの人に聞いてもらった方が言えてるかとか分かって楽しかったし、よかった。

・みんなで発音を考えて練習したり、少し難しかったが、

楽しかった。

・少し緊張して間違えてしまったけど、最後まで言えてよかったです。スクリーンは、見やすかった。

・みんなで一緒に英語で「Show and Tell」をするのは、とても新鮮で楽しかったです。私は D の少しみんなより長い文だったけどきちんと覚えて発表できてよかったです。また、スクリーンを使った授業はとてもわかりやすくおもしろかったです。また使って授業してほしいです。

・発音が難しい単語や英文があっという間に覚えやすかったです。練習すれば、前で発表ができるぐらいになりました。パワーポイントは、見やすく、さし絵も付いていたので理解も早くできました。

・難しかったけど、楽しかった。

・班で英語を話した。相手が元気に話したら、こっちまで元気になった。

・カードを使ったり、A,B,C で声を合わせたりして発表するのは楽しかったです。

・A,B,C の「Good」を最初はぜんぜん 3 人が合わなくて、でも何回かしていくと、2 秒後とかかぞえなくてもそろってきて、元気にできたのでよかったです。自分一人だけのところも大きな声で元気に言えたのでよかったです。

・緊張した。最後の 3 人で「Good」と合わせるところがあわなかったり、小さかったりして、大変だった。スクリーンを使うと、スペルが分かりやすくて良かった。

・最初はつまったりしていたけど、だんだんみんなでそろうようになって楽しかったです。パワーポイントがあったおかげで文字も大きく絵もありとてもわかりやすかったです。

・自分の役割を決めて、班のみんなで練習し、一つの事に取り組むという活動は楽しかったです。

・みんなの前で発表するのは、ちょっとはづかしかったけど、Good を 3 人でそろえることができてよかったです。

・一つ一つの発音に気をつけて取り組んだ。s や es、単語のアクセントを細かく気をつけた。もう少し大きな声で取り組めたら良かったと思います。スクリーンを使っていて、写真と単語が写っていたので覚えやすかったです。

・楽しかった。発音とか気をつけながら言えた。4 人で発表するのも、練習をがんばってできた。パワーポイントは、すごく見えやすかった。

・前に出るのは緊張するかと思ったが、練習してしゃべれ

るようになると緊張せずに大きな声でしゃべれた。みんなとリズムを合わせるのが難しかった。パワーポイントを使うことによって、単語の振り返りや発音練習の効率化ができていて、スムーズな復習練習ができた。

・「Good」のところを合わせるのが楽しかったです。

・私は、グループですると、声が小さくなってしまうけど、Nくんが **some** のところをもっと大きな声でと言ってくれてうれしいです。前で発表することで、発音がうまくなった。Good のところが最初は合わなかったけど発表のところは合
ってうれしかったです。

・皆の前で言うのは少しはづかしかったが、言えたので良かったと思いました。自分の分のセリフをしっかり言えたので嬉しかったです。

・少し緊張したけど、田中君が「全力で聴しい」とか、面白いことを言ってくれたりして、言う前も、少し緊張がほぐれた。

・しっかり発音よく言えなかったけど練習して楽しかった。

・簡単だった。覚えやすかった。

・みんなで発表するということが、たくさん練習しようと思えて、覚えられるので、とても良いと思いました。

・最初は、自分が担当したところをど忘れしたり、かんでしまったりしたけれど練習することによって本番はスムーズに言うことができた。パワーポイントを使うことにより、そのつづりがどのような意味を持ち、何を指しているかがよく分かっていいと思った。

・パワーポイントは、絵や文字が大きく黒板よりみやすいし、わかりやすいと思いました。

・複数形が人の前でうまく言える。自信をつけるために、みんな一人一人練習して、今日練習したことは頭の中に自然に入ったので、今回の授業はいいと思いました。

・練習はうまくできた気がしますが、発表の時に声が小さかったので次は気をつけたいです。見やすいのでスクリーンはいいなと思いました。

・みんなではきはきと練習できてよかった。みんなで楽しくできてよかった。

・文が短いのであまり覚えたという感じがしなかった。

・大きな声で言えませんでした、スラスラと言えました。

・声が小さかったので今度やるときは、大きい声でやりたい。

・覚えるのが大へん。

- ・顔を上げて言えば良かった。
- ・have を have a と言ってしまってなおすのが大変でした。
- ・前にでるのは緊張したけれどはきはき言えたのでよかった。
- ・やっぱり日本人なので目を合わせるのがはずかしい。だけどその壁を乗り越えたい。
- ・発音のしかたはわかっていたがみんなの前でしゃべると緊張してあまり大きな声では言えなかった。また、他のも今度は発音したいです。
- ・班のみんなで協力してできた。「Good」の部分をもう少し合わせて言えたらよかった。
- ・実際に英語を使って、みんなの前で発表するので、とても緊張しました。でも、うまくできて嬉しかったです。これからこういうのが増えると楽しくなると思った。
- ・声が小さかった。もう少し英語らしい発音をしてあげればよかったと思った。はずかしかったけどよかった。
- ・緊張してあまり上手にできなかったけど、がんばれました。
- ・みんなと前で発表することができて、楽しかった。間違えずに言えたのでよかった。
- ・楽しかった。enough の発音が難しかったけれど、これをやってできるようになった。わからない発音があったけど、分かったのでよかった。
- ・短時間で文章を覚えて言うのはむずかしいかなと思ったけど、10 回以上言って暗記したらスラスラ言えました。最後の「Good」が声が小さかったのが残念でした。
- ・楽しかった。
- ・一人いなかったのを H くんがうめてくれてうれしかった。some の発音が難しかった。
- ・ポテトの言い方が難しかったです。スクリーンは、見やすくわかりやすかった。
- ・たくさんの人の発音や声を聞けたのでよかった。とても緊張したけどいつも通り言えたのでよかった。
- ・班での活動が英語の時間でできたのでよかったです。
- ・楽しく学ぶことができた。
- ・グループでの発表なのでがんばって取り組めたと思いました。「Good」もうまくできたのでよかった。
- ・スクリーンを使って説明してくれると、見やすいし、分かりやすいのでよかったです。班のみんなで協力できました。でも、少し笑ってしまったのでそこを直したいです。

- ・ こうやって 4 人でみんなの前に出て発表することによって、英語の発音の仕方をもう一度振り返ることができたので、良かったなと思いました。
- ・ みんなでタイミングを合わせるのが楽しかった。
- ・ I have を I have a に間違えそうになった。班のみんながしっかりできていてとてもやりやすかったです。
- ・ 前で発表するのは楽しかった。
- ・ 楽しかった。Good を合わせるのが難しかった。スクリーンの方が見やすくて楽しかった。
- ・ たくさんの人を目の前でやって、とても緊張していながらやっていた。練習の時よりも声が小さくなってしまった。慣れない英語での発表が難しかった。
- ・ 前で発表するのが発音がおかしいか心配だったので緊張しました。
- ・ 前に立ったら、何言うか忘れた。次は自分の持っている物でやりたいです。

「Show and Tell」についての記述式のアンケートでは、「楽しかった」「嬉しかった」と授業後の思いを書いた生徒が多数あった。では、生徒たちは、何に対して「楽しさ」や「喜び」を感じたのであろうか。生徒たちの記述から、分析していく。

まず、「自分自身の成長」についてである。次のような記述から、できなかったことが、だんだんできるようになったことが楽しかったと考えられる。「最初はつまったりしていたけど、だんだんみんなでそろそろようになって楽しかったです」「楽しかった。enough の発音が難しかったけれど、これをしてできるようになった。わからない発音があったけど、分かったのがよかった。」「Good のところが最初は合わなかったけど発表のところは合ってうれしかったです。」

次に、一人でするのではなく、班のみんなで一つの発表に取り組んだことが楽しかった生徒たちも多かった。授業中も班での練習の際には、お互いにアドバイスし合いながら、活動を進めている姿が見られた。「みんなで楽しくできてよかった」・自分の役割を決めて、班のみんなで練習し、一つの事に取り組むという活動は楽しかったです。みんなで楽しくできてよかったみんなで発音を考えて練習したり、少し難しかったが、楽しかった。」

また、スクリーンやパソコンといった ICT 機器を活用したこ

とに対する感想を書いた生徒たちもいた。「スクリーンを使って説明してくれると、見やすいし、分かりやすいのでよかった」「パワーポイントは、絵や文字が大きく黒板よりみやすいし、わかりやすいと思いました。」いうように「分かりやすい」という評価をしている。

Ⅲ 授業に対する考察

生徒たちのアンケートから全体として、今回の授業を楽しんでいる様子がうかがえる。「前で発表するのは楽しかった」「うまくできて嬉しかった」「最初は緊張したけど、何度も練習するうちにできるようになった」という感想が多く見られた。また、「今度やるときは大きい声で言いたい」といった次への意欲を感じられる感想もあり、効果的な授業で会ったと言える。

では、どのような点で効果的であったといえるのかを生徒たちの感想から考察する。Show and Tell のアンケート結果から、実験授業において、効果的であった理由を次のように分類することができる。子どもたちの声からまとめていきたい。

① ICT 機器を使ったことが効果的だった。

次のような記述から ICT 機器の使用が効果的であったと考えられる。「スクリーンがあった方が見やすいし、何を説明しているかわかるのであった方がうれしい。」「写真や絵もきれいで図も大きくて、とてもわかりやすかったです。」「スクリーンで単語と絵と一緒に見ると覚えられて、とてもわかりやすい、意味もわかる。」「スクリーンは、大きいのでとても見やすかったです。」「パワーポイントは、見やすくて、さし絵もついていたので理解も早くできました。」「スクリーンを使うとスペルがわかりやすくて良かった。」「パワーポイントがあったおかげで文字も大きく絵もありとてもわかりやすかったです。」「スクリーンを使っていて、写真と単語が写っていたので覚えやすかったです。」「パワーポイントを使うことによって単語の振り返りや発音練習の効率化ができていて、スムーズな復習練習ができた。」「パワーポイントは、絵や文字が大きく黒板よりみやすいし、わかりやすいと思いました。」「スクリーンを使って説明してくれると、見やすいし、分かりやすいので良かったです。」

授業では、3 回パワーポイントを使用した。

(1) 新出単語の導入

単語と写真や絵を入れてパワーポイントを作成した。

今回の文法事項である名詞の語尾の変化は、色を分けた。
発音するとき、絵と文字を同時に見てイメージできるようにし。

(2) プレゼンテーションの説明
プレゼンテーションのポイントを示した。

(3) 4人班でのプレゼンテーション
一人ずつのセリフにあったパワーポイントを提示した。
また、発表の時に使用する PPT と同じ絵から一人ずつにカードを配布し、グループ活動の中では、そのカードを他のメンバーに見せながら「Show and Tell」を行った。

② グループ活動が効果的だった。

一人で覚えるのではなく、班の仲間と活動することで、良い影響を受けている様子がわかる。「班で英語を話した。相手が元気に話したら、こっちまで元気になった。」。また、「私は、グループですると、声が小さくなってしまいうけど N くんが some のところをもっと大きな声でと言ってくれてうれしいです。」という記述からは、生徒同士が互いにアドバイスを合っている様子がわかる。「少し緊張したけれど、T くんが『全力で聴しい。』とか、面白いことをいってくれたりして、言う前も少し緊張がほぐれた。」「みんなではきはきと練習できてよかった。みんな楽しくできてよかった。」「班のみんな協力してできた。」「みんなでタイミングを合わせるのが楽しかった。」「自分の役割を決めて班のみんな練習し、一つの事に取り組むという活動は楽しかったです。」「みんなで発音を考えて練習したり、少し難しかったが、楽しかった。」

③ プレゼンが効果的だった。

「こうやって4人でみんなの前に出て発表することによって、英語の発音の仕方をもう一度振り返ることができたので良かったなと思いました。」「前で発表するのが楽しかった。」「みんなと一緒に英語で Show and Tell をするのは、とても新鮮で楽しかったです。」「英語で発表するのは難しいけど、英語らしく言えて楽しかった。」「前に出て発表するのは、少しはづかしかった。けど、練習の時に声がそろわなかった「Good」がそろったので嬉しかった。」「みんなに伝えるというのは難しかったけど、楽しかった。もし、また前で発表するときがあれば、今日よりもっとハキハキ言えるようになりたい。」「前で発表するのは、楽しかった。発音をきれいにするように舌の動きも気をつけたので、これからも意識をして

いきたい。」

さて、「英語の得意な生徒たち」と「英語がとても嫌い」と答えていた生徒たちはこの活動をどのように受けとめたのだろうか。

まず、「英語の得意な生徒たち」はどのように受けとめたのかをアンケート結果から考察する。

Aは、3歳ぐらいから英語を学んでいて、英検2級である。入学時のアンケートでも「英語が好きなのでがんばります。よろしくおねがいします。」と意欲的であった。Show and Tellについては、「最初だったので、少しちゃんと言えるか心配だったけど、言えて良かった。『Good』のところで声を合わせてよかった。」と感想を書いている。みんなの前で発表する前には、少し不安な気持ちがあったことがわかるが、発表の後には満足している気持ちが表れている。

Bも3歳から英語を学んでいて、英検準2級である。Show and Tellについては、「4人でグダグダなのを合わせるのに時間がかかったけど、「せーの」と言って息を合わせて行くのが楽しかった。」と感想を書いている。4人での活動を楽しんでいた様子が見える。

Cは、1年から4年までアメリカで英語を学んだ。英検2級である。Show and Tellについては「最後の『Good』をそろえるのが難しかったです。班の全員がセリフを覚えていたら、もっと良かったかな。」と書いている。

得意な生徒たちにとっては、自分だけ覚えるのであれば、簡単な課題であったが、班のみんなで発表するということや声を合わせてというのが自分一人ではどうにもならないところでもあり、面白いところでもあったようだ。

それでは、Show and Tell について、入学時「英語がとても嫌い」と答えていた生徒達はどのように受けとめたのだろうか。3人は、以下のように記述している。

D「顔を上げて言えば良かった。『Good』をそろえたかった」 E「短いため覚えやすく、発音もしやすいと思った。」 F「みんなでタイミングをあわせるのがたのしかった」
--

「英語が嫌いな生徒たち」にとっても取り組みやすい活動であったとわかる。

今回のアンケートで「(英語が)とても嫌い」と答えた生徒は、4名である。しかも4名とも「(英語が)とても苦手」とも答えている。また、全員がC組に所属している。面白いことに入学時の生徒たちとは異なっている。彼らのアンケートの記述を見ると平仮名表記が多く、「覚える」「大変」「読み」

「書き」「難しい」といった中学一年生段階では、すでに習得しているはずの言葉も漢字が使われていない。アンケートにおける記述の量が少ないことも共通している。

Gは、**Show and Tell** についての感想では、「あまり言うことが少ないから覚えやすい」と肯定的にとらえている。英語がとても嫌いな理由は、「授業がはやく進んでわからないからおもしろくない。」、とても苦手な理由は、「英語のよみ、かき、はつおんなどわからないから」と答えている。他教科の学習についても困難を抱えている生徒である。提出物を出さなかったり、提出しても不完全であることが多い。

Hは、**Show and Tell** についての感想では、「A,B,C は、短いからおぼえやすいけど、Dは長いからおぼえてすごいな、と思いました。good をあわせるのがむずかしい。」と書いている。英語がとても嫌いな理由は、「むずかしいから。」とても苦手な理由は、「おぼえられないから。」と答えている。

I は、**Show and Tell** についての感想では、「have を have a と言ってしまってなおすのが大変でした。」と自分を分析している。英語がとても嫌いな理由は、「単語がむずかしい。発音がむずかしい。」と、語彙に対する困難さを述べている。とても苦手な理由は、「単語を書くのがむずかしいです。」と答えている。

J は、**Show and Tell** についての感想では、「おぼえるのが大へん。」、英語がとても嫌いな理由も「おぼえるのが大へん。」、とても苦手な理由は、「おぼえるのがにがて。」と答えている。知識の定着に困難を感じていることがわかる。

それでは、英語が「とても好き（どちらかというとき好き）」「とても得意（やや得意）」と答えた生徒は、どのような特徴があるだろうか。ここでは、成績が優秀であった4名について見てみる。

Kは、**Show and Tell** の授業については、「普段の授業に比べて、スクリーンを使っていて、絵もかいてあるし、(s)や(es)をはっきり見えたのでわかりやすかったし、一つ一つ先生が言って説明してくれたのでとても良かったです。」と感想を書いている。また、「とても好き」な理由としては、「授業が笑うことが多くておもしろいし、書いたり、言えたときの気持ちが楽しいからです。単語を覚えるのが好きです。」、「とても得意」の理由としては、「単語を覚えて書くのが好きなので、覚えやすいし、授業でもよく手を挙げていると思うからです。」と答えている。A27は、授業にも積極的に取り組んでいる。自分でも書いているように授業中は、しっかりと挙手

して発言している。また、成績も優秀で、定期考査は、ほぼ満点に近い。

Lは、**Show and Tell**については、「みんなの前に出て英語で発表するのは楽しかったです。これからは、もっと長い文を発表したいです。」と書いている。英語が「とても好き」という理由は、「先生達の授業がわかりやすく、楽しいからです。みんなの前で発表したりするのは、きんちょうするけど好きだからです。」、「やや得意」な理由は「単語を覚えたり、英語で会話したりするのが好きだからです。」と答えている。

Mは、**Show and Tell**について、「楽しかった。**enough**の発音が難しかったけれど、これをやってできるようになった。分からない発音があったけど分かったのでよかった。」と感想を書いている。英語が「とても好き」な理由については、「面白いから。将来役に立つと思うから。文法とかが違って難しいけど楽しいから。」、英語が「やや得意」理由は「英検の勉強をしたことがあるから。」と答えている。

Nは、**Show and Tell**について「スクリーンを使って説明してくれると、見やすいし、分かりやすいので良かったです。班のみんなと協力できました。でも、少し笑ってしまったので、そこを直したいです。」と感想を書いている。英語が「どちらかというと好き」な理由は、「英文を書けると楽しいし、難しい発音もしゃべれるとうれしいから。」、英語が「とても得意」な理由は、「単語や英文を覚えたり、発音するのが得意だから」と答えている。

成績が優秀であるから、「とても好き」「とても得意」という結果にはなっていない。授業を楽しんで受けている様子がわかる。できるようになったことに喜びを感じている。**Show and Tell**では、同じ会話文の発表であったにもかかわらず、Jが「おぼえるのがたいへん。」と書いていたのに対し、Mは「もっと長い文を発表したい。」とさらに難しい課題に挑戦したいという意欲が感じられる。

第三項 今後の展望と課題

実験授業Ⅰと実験授業Ⅱを実施し、アンケート調査とインタビューを行い、その効果を明らかにした。生徒たちの声から、これらの実験授業が効果的であったことがわかった。しかしながら、今回の実験授業では、生徒の表現力を十分に発揮することはできなかった。自由に生徒たち自身の言葉を駆使して、彼ら自身の体験をもとにした活動なら、もっと生徒

の良さを発揮できるかもしれない。次のような活動が考えられる。

I 「協同学習」と「ICT」を取り入れた英語教育の授業構想

単元構想

- 第一時 班でのテーマ話し合い
- 第二時 英文の作成
- 第三時 英文の清書、班での原稿の検討
- 第四時 班での練習
- 第五時 ALT による発音指導
- 第六時 発表
- 第七時 DVD の作成
- 第八時 英語文集の作成

また、学校紹介を英語でする取り組みも考えられる。新入生にむけて附属中学校の紹介をするというテーマで行えば、生徒たちのモチベーションも高まることが予想される。下は、配布プリントの案である。

「Welcome to FUZOKU JUNIOR HIGH SCHOOL! ~新入生に附属中学校を紹介しよう」

いよいよ 3 学期になりました。4 月には、新入生を迎えます。英語で附属中学校の紹介しましょう。

4 人グループによる DVD の作成 班ごとにテーマを決めて作成する。

テーマ（例） 1 附属中学校の朝 2 部活動 3 給食 4 一日の生活 5 附属中学校の生徒たちは、どこから来ていますか？（地図） 6 放課後の生活（発表生徒の日常「What do you do after school?」「What time do you go to bed?」生徒同士の何気ない日常の会話）

7 附属中学校の風景（校内） 8 附属中学校の風景（校庭） 9 面白いところ

写真と会話を考えましょう。

A どんな写真を見せるか班で考えましょう。

（例）音楽室の写真、部活をしているときの写真、文化祭の写真、体育祭の写真、一日の生活の写真英文例（会話形式にしてもよい）

① 部活動

I like tennis. I am a member of the tennis club. I play tennis every day. 僕は、テニスが好きだ。テニス部の一員だ。毎日テニスをしている。

② 給食

A: This is my friend, Yoshiko. She is talking with her classmate. これは、私の友達よ。クラスメートと話をしています。 B: What is she eating? 何を食べているの。

③ 文化祭

In our school, we have a chorus contest in November.
私たちの学校では、11月に合唱コンクールがあるよ。

④ 日常生活

A: I get up at 6:30 every day. 僕は、6時30分に毎日起きる。

How about you? .君は、どうですか。

B: I get up at 5:10. 私は、5時10分よ。

C: Wow. うあー！

⑤ 行事

A: We went to Nagoya by bus. バスで名古屋に行ったよ。

B: Where is this? これは、どこですか。

C: This is Shirakawa Park. 白川公園だよ。

The trees are very beautiful. 木々がとても美しいね。

B 班で英文を考えましょう。一人3文以上言います。

Ⅱ 他の活動とのつながり

英語以外の教科や行事と関連をもたせて、プロジェクトを計画することも有効と考えられる。

中学校には、たくさんの行事があり、生徒たちは、社会見学や修学旅行といった様々な体験をする。行事は、「成長の機会」であり、大きな意味を持っている。行事の後には、班での発表など事後学習を常に行っている。その後、英語での発表を試みることも考えられる。行事とリンクしたプロジェクト学習を組み立てることで、もっと充実した活動となる。また、道德の授業では、仲間づくりの取り組みも行われる。日本語で活動した後に同じ活動を英語ですることは、有効であると推測される。

かつて4人班をF中学校に導入した時、「英語だけでしてい

るのではあかん（効果がない）。他の教科でもみんながすることが大事や（大切である）。みんなでするからできるんや（可能になる）。（ ）内 筆者加筆」と言った同僚がいた。全く同感である。また、「協同学習」「ICT」と冠してはいないが、それらを内在した取り組みはF中学校ではすでに多くなされている。

個々の実践は、それぞれ特色があり、レベルの高いものであったと思われる。しかしながら、3年間を見通した計画とはなっていない。今後は、どの学年のどの時点でどんな取り組みを導入するのか英語科として共通理解し、実践していくことが望まれる。いったんサイクルができれば、単元の第一時において、「昨年の先輩方の発表」を見せ、到達点（ゴール）を明らかにした上で活動を進めることができる。この方法は、静岡大学島田中学校の「くさび単元」で導入されており、大変効果的と考えられる。

F中学校の生徒たちは、自己表現力に優れた資質を持っていると感じる。今後はその資質をさらに伸ばす取り組みを模索していきたい。

第三節 アンケート結果と分析、インタビュー

この節では、F中学校アンケート調査とその結果について述べ、生徒たちの英語に対する好感度、得意意識の推移について明らかにする。抽出生徒へのインタビューから、アンケート調査だけからはわからなかった生徒たちの内面を探っていく、仮説の検証を行う。

第一項 アンケート結果と分析

以下のように4回のアンケート調査を実施した。

第1回 4月 入学直後

第2回 5月 実験授業（名刺交換）と初めての定期テスト後

第3回 7月 実験授業（Show and Tell）後

第4回 12月 2学期最後の授業

生徒の現状について把握するために2012年4月に入学した1年生の英語に対するアンケート調査を第一回目の授業で行った。

I 第1回 アンケート調査

対象 国立 F 中学校 中学 1 年生 144 名

内容 英語に対する意識

実施日 2013 年 4 月 10 日

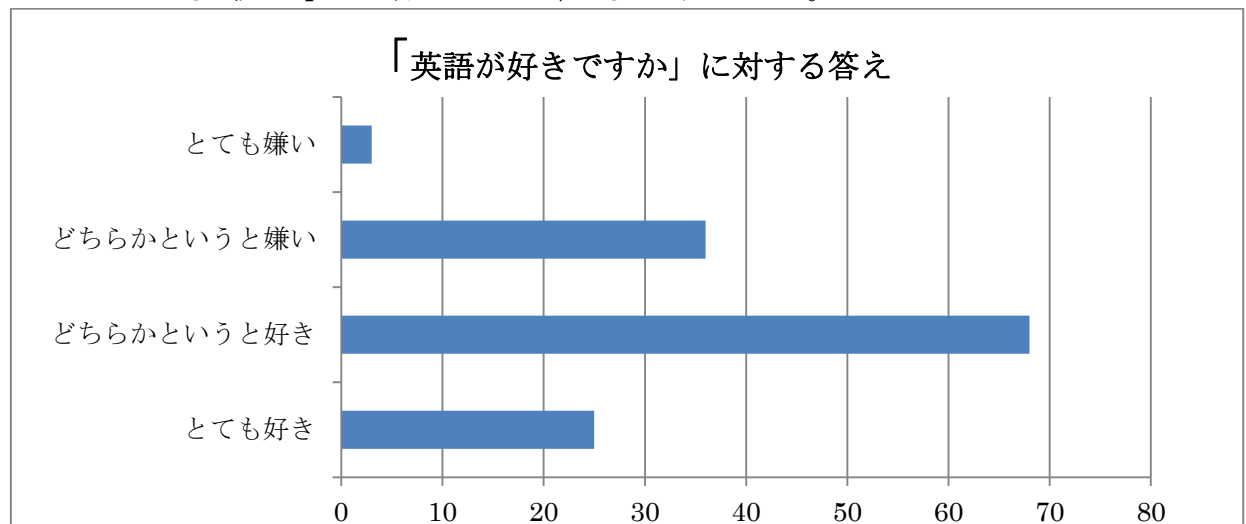
2013 年 4 月 11 日

「あなたは英語が好きですか、嫌いですか？」という問いに対しての人数は、以下のものであった。

(A~D はクラス、数字は人数)

	A	B	C	D
とても好き	9	9	12	6
どちらかというとき好き	15	19	14	20
どちらかというとき嫌い	12	8	8	8
とても嫌い	0	0	1	2

この結果から、「とても好き」と答えた生徒は、36 人で全体の 25% である。「とても好き」、「どちらかというとき好き」と答えた生徒の合計は、104 人で 72% となり、全体としては英語に対して好感を持っている集団であることがわかる。一方で「とても嫌い」と答えた生徒も 3 人いる。



「あなたは英語が得意ですか、苦手ですか？」に対する答えは以下のものである。

	A	B	C	D
とても得意	3	2	3	0
やや得意	18	17	15	15
やや苦手	11	13	12	18
とても苦手	4	4	6	3

「とても得意」と答えた生徒は、わずか 8 人で、全体の 0.5% にしかならない。「やや得意」と答えた生徒を含めると 73 人

となり、50,7%とほぼ半数となる。この結果から、約半数の生徒たちは、英語に対してすでに苦手意識をもっていることがわかる。

また、英語の能力については、小学1年～小学4年アメリカに在住した米子さんと3歳くらいから英語を習っている早子さんは、英検2級、また、3歳くらいから習っている英子さんは、英検準2級というように早期教育によって高い学力の生徒たちもいることがわかった。

2ヶ月が経過した中で、再びアンケート調査を行った（2013年5月27日実施）。初めての中間考査が終了した直後である。結果は、次のようであった。

「あなたは、英語が好きですか、嫌いですか？」に対する答えは以下のである。

	A	B	C	D
とても好き	12	8	10	10
どちらかというとき好き	17	21	10	17
どちらかというとき嫌い	7	6	12	7
とても嫌い	0	1	4	2

その理由については、次のような答えが書かれている。

「とても好き」「どちらかというとき好き」と答えた生徒の理由

・単語を書いたり、覚えたりするのが好きだから。・英語は、世界で一番使われている言葉だから、英語がしゃべれたり、使えたら、いろんな国の人とつながれるからです。・英語で新しい単語が出て、それを書けたときがとてもうれしくなって楽しくなってくるから。・英語がどんどん分かってくるにつれて、話したり、書いたりできるようになっていくから。・英語は、小さいころからかかわっていたので、とても好きです。日本語とは、違う言い方だけど意味はいっしょというのが面白いから。・日本語とは大きくちがって、難しいけれどとても楽しめるし、外国人との会話を大人になってできるようになりたい。・小さい頃からやっているし、今まで読めなかったり、書けなかったり、訳せなかったものが、新しく習うことによってどんどんできるようになっていくのが、とても楽しいし、おもしろいから。英語は、やっているだけで面白くて楽しい。・小6のときに英語を習いはじめて、それ以来英語が好きです。・英語を書くのが好きだし、しゃべるのも好きだし、楽

しいからです。・授業をやっていくにつれて、英単語を見ずに書けることや文の意味がわかったりするのがとても楽しいから。・英語が好きな理由はだんだん分かってくるから。分かってきたら楽しいから。・英語を学ぶと自分の知らないことがわかるから、外国の人と会話ができると楽しいと思うから。・英語は世界で一番使われている言葉だから、英語がしゃべれたり、使えたら、いろんな国の人とつながれるからです。・英語をやっていて、どんどん新しい単語を覚えていける。その単語を使って、コミュニケーションをとるのが楽しい。・昔から英語を書くのが好きというか、あこがれだったし、日本とは違う言葉でしゃべったりするのに興味があったからです。・単語が日本語とぜんぜんちがってそれがいいと思うから。・文の形とかその順番を考えるのが楽しいからです。音楽が好きで歌とか歌っているから。外国が好きで将来英語で話す仕事がしたいと思っているから。英語で話すと気持ちがいいから。単語を書くのが楽しい。発音はいまいち。英語でコミュニケーションをとるとかっこいいから。・やっていておもしろいし、発音とかを研究するのがおもしろいから。語いの数が増えてきたから楽しい。・最近になって前より英単語とかが覚えられるようになったから。・英語を話せる人はかっこいいから。・英単語を書いたりするのが、書けるとうれしくなるから。好きだから。・文章をつくるのが楽しいから。アルファベットカードを並べたりするのが楽しいから。・英語の単語など書いたり読んだりしているとき楽しいし、班で協力したりできるから。英語を理解することが楽しいし、小学校で英語のゲームをして以来ずっと好きになった。英語でしゃべるのが楽しいからです。日本語と違う言葉なので、難しいところもあるけど、ちがう国の言葉

なので関心があるからです。・英語で話すのが好きだから。・単語のつづりとか覚えやすいから。・英語は覚えることがたくさんあって大変だけど、歌やゲームがあって楽しい時もあるから。・そんなにできないとは思わないし、英語でしゃべるのは好きです。・単語を書いていると楽しいし、前は全然できなかったけど少しできるようになったから。・答えがわかってきたし、おもしろい。・楽しいし、解けると嬉しいから。単語を書くのは楽しいし、やっていてもあきないからです。・単語があまり覚えられなくて、いやだけど、英語を発音するのが好きだから。・英語の意味やスペルを書いたりするのが好きだから。英語はあまり好きじゃないけれど、わかると楽しいから。・授業や先生はとてもいいけど、つづりなどを書くのが苦

手だからです。

この結果から、「英語を好き」と感じている生徒達には、様々な理由があるとわかった。「英単語を覚えることが得意」「書いたり、読んだりしているとき楽しい」と語学に対する適性を持っていることで楽しさを感じている生徒がいる一方で「外国人との会話を大人になってできるようになりたい」「将来英語を話す仕事がしたいと思っている」といった将来的に役に立つという理由も挙げられている。また、「小学校で英語のゲームをして以来ずっと好きになった」、「小さい頃からやっている」というように中学校入学以前か英語に対してよい印象を持ち続けていた生徒達も多い。

Jeremy Harmer (1995) は、『人はなぜ英語を学ぶか』の中で、言語学習における成功における「動機づけ」の重要性を述べている。『本当に学びたい学習者は、学ぶ環境がどうであっても、言語学習はうまくいくとしばしば言語教育に関わる人は言う。ある動機づけを受けた学習者は、仲間より、有意に成績がよい状況を教師はだれでも思い浮かべることができる。また、彼らは、どんな専門家も不十分と考える教授法を使うのに言語学習に成功する。そのような現象を考えると、学習者が授業にもたらず動機づけは彼らの言語学習に影響する最大の単一要因であると提唱することは理に叶っていると思われる。』

「どちらかという嫌い」「とても嫌い」と答えた生徒は、どのような理由によるものであろうか。以下は、生徒たちの理由である。

「どちらかという嫌い」「とても嫌い」と答えた生徒の理由

・単語が覚えられない。・私は覚えることが苦手で、単語を書くのが苦手です。しゃべるのも、表情がなくて、いつも注意されます。テストの点が悪かって、がんばっても変わらないから。苦手で難しくてよく分からないからです。・単語が覚えられない。・単語がたくさんあって、覚えるのが大変だから。・まだ英語の聞き取りがうまくできなかつたり日常的に使うわけではないから。・スペルを覚えて書くのが苦手だから。・単語を覚えるのが難しいので、なかなか覚えられないからです。・発音が難しいから。聞きとりにくいから。・発音が難しいから。・単語を覚えるのが大変だから（多数）。文を書くのが苦手。・英語が得意ではないから。・よくわからないから。・暗記することを前提としている教科だから。・テスト勉強の

時、覚えにくいから。

この結果から、英語が嫌いになっている要因は、「単語を覚えるのが苦手」「英語の発音が難しい」という語彙に対する苦手意識があることがわかる。

「あなたは英語が得意ですか、苦手ですか？」に対する答えは以下のようである。

	A	B	C	D
とても得意	4	4	4	2
やや得意	15	14	13	16
やや苦手	11	15	12	11
とても苦手	6	3	7	7

5月のアンケート調査は、中間テスト直後の結果である。A～C組では、入学時には得意と感じていた生徒が、苦手意識を持ち始めていることがわかる。D組では、得意と感じる生徒数が増加している。1年生全体では、英語が好きと感じている生徒数は、105名でわずかながら入学時より増加している。中学校に入学して、2ヶ月間学習を進める間に難しさを感じながらも、英語に対する興味が出てきたとみとることができる。

アンケート調査（2013年7月9日実施）

実験授業の後、生徒の変化について把握するために英語に対するアンケート調査を行った。

アンケート調査

対象 国立F中学校 中学1年生 144名

内容 英語に対する意識

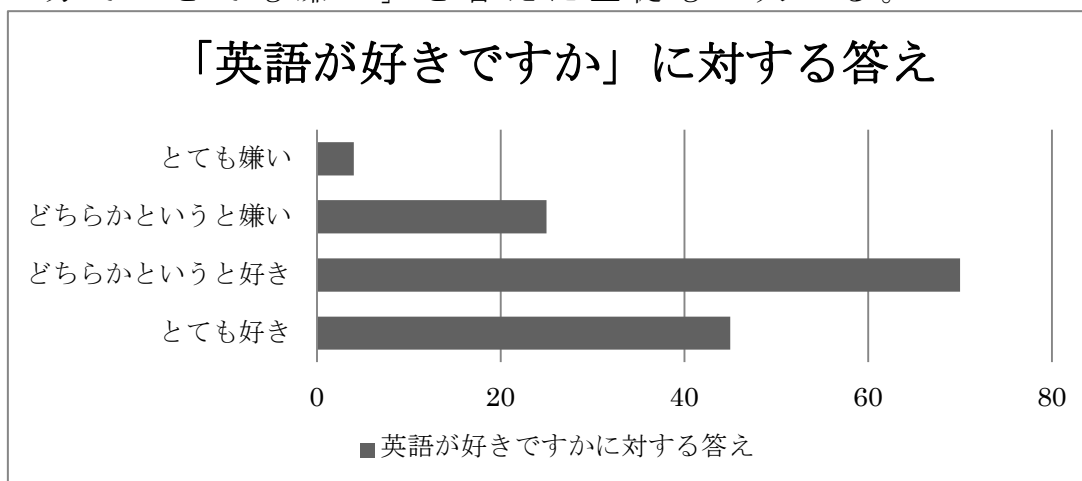
「あなたは英語が好きですか、嫌いですか？」という問いに対しての人数は、以下のようであった。

（A～Dはクラス、数字は人数）

	A	B	C	D
とても好き	13	7	13	12
どちらかという好き	17	22	12	19
どちらかという嫌い	6	7	7	5
とても嫌い	0	0	4	0

この結果から、「とても好き」と答えた生徒は、45人で全

体の 32.25%となり、入学時に比べて、9 名増加した。「とても好き」、「どちらかというと好き」と答えた生徒の合計は、115 名となり 11 名増加し、79.92%となった。全体としては英語に対して好感を持っている生徒数は増加したと言える。一方で「とても嫌い」と答えた生徒も 4 人いる。



「あなたは英語が得意ですか、苦手ですか？」に対する答えは以下のように変化した。

	A	B	C	D
とても得意	5	2	3	3
やや得意	1 6	2 2	1 6	1 6
やや苦手	1 1	9	1 2	1 3
とても苦手	4	3	5	4

「とても得意」と答えた生徒は、13 人となり、入学時わずか 8 人でしかなかったのに比べると、増加し、全体の 9%となった。「やや得意」と答えた生徒を含めると 83 人となり、57.7%と増加した。この結果から、一学期間、中学校の英語授業を受けた結果、全体として英語に対して得意意識を持つ生徒が増えたことが分かる。

アンケート調査結果

日時 2013 年 12 月実施

対象 F 中学校（中学 1 年生 142 名）

「英語の学習についてどう思いますか」という質問に対して、「好き」「嫌い」については、下のような結果になった。

	A	B	C	D
とても好き	1 3	8	1 4	6
どちらかというと好き	1 5	2 2	1 0	1 7

どちらかという嫌い	9	3	9	1 3
とても嫌い	1	1	3	0

「とても好き」「どちらかという好き」と肯定的な回答をした生徒は、103名（72.5%）であった。「とても嫌い」と回答した生徒5名は、以下のように理由を述べている。

- O 宿題が多い。あと、単語が覚えられないからです。
P テストの点数が低い。勉強してもかわらない。
I ぜんぶおぼえられない。
J 英語は大嫌い（大きな文字で力強く書かれていた）。僕は外国なんていくきもないし、外国人との交流もしようともおもわない。だから英語はいい。
D 単語を覚えるのがつらい。発音も似ているのがたくさんあるし、下を巻くとか難しくて出来ない。

「単語を覚えること」「英語特有の発音」に困難を感じていると考えられる。また、Jの生徒のように「英語を学ぶ意義」について疑問を持っている生徒もいることがわかる。次に「英語の学習についてどう思いますか」という質問に対して「得意」「苦手」については、下のような結果になった。

	A	B	C	D
とても得意	4	4	3	1
どちらかという得意	1 7	1 2	1 3	1 4
どちらかという苦手	9	1 6	1 4	1 4
とても苦手	6	2	6	7

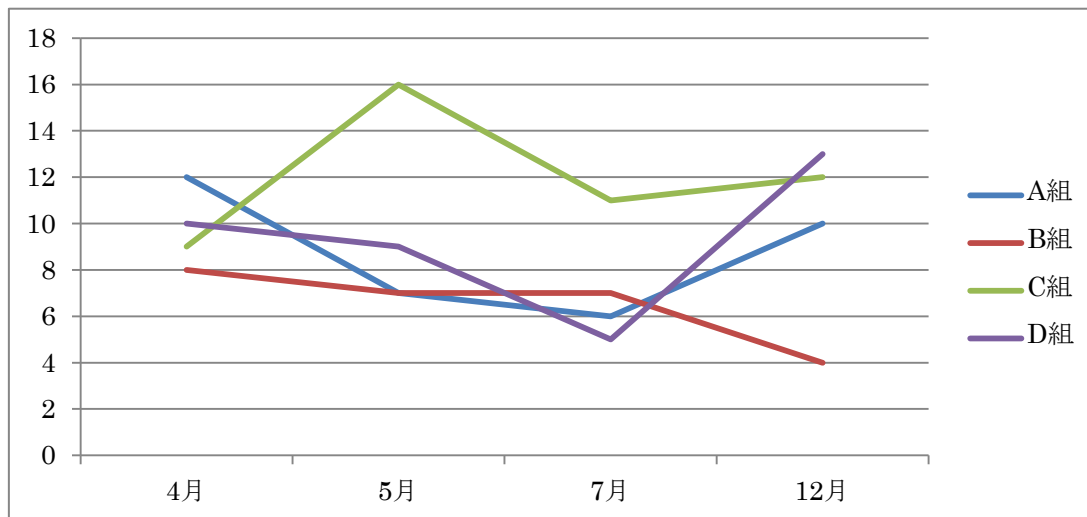
「とても得意」「どちらかという得意」と肯定的な回答をした生徒は、68名（47.9%）であった。「とても苦手」「どちらかという苦手」と否定的な回答をした生徒は、74名（52.1%）であり、肯定的な回答をした生徒数より多かった。

質問1において、「英語がとても嫌い」と回答した生徒は、全て「英語がとても苦手」と回答している。理由は、下の通りである。

- O ぜんぜんわからないし、テストも点数がとれないからです。
P 発音がよく分からない。単語のつづりが意味不明だからおぼえれない。
I たんごをおぼえられない。

- J 日本にいるのに自分は日本語 日本 の 漢字 も ま と も に
できないのに えいご なんて。
- D 発音 が 難 し い。

1 回～4 回のアンケート調査における生徒数の推移と考察



上のグラフは、「英語がとても嫌い」または「どちらかという嫌い」と答えた生徒数のクラス毎の推移を表している。

4 回のアンケート調査の変化について考察する。特徴的なのは、B 組と D 組のグラフである。B 組では、少しずつではあるが、確実に英語の嫌いな生徒数が減少していることがわかる。B 組は、授業態度が抜群で、聴く姿勢ができています。特に 2 学期になってますます集中してできるようになってきた。D 組では、一学期は、少しずつ「英語が嫌いな生徒数」が減少していたのであるが、最後のアンケートでは急に人数が増加した。2 学期

の授業では、落ち着きの無い様子が見られた。授業態度と「好き」「嫌い」の数が相関関係にあるように思われる。授業が落

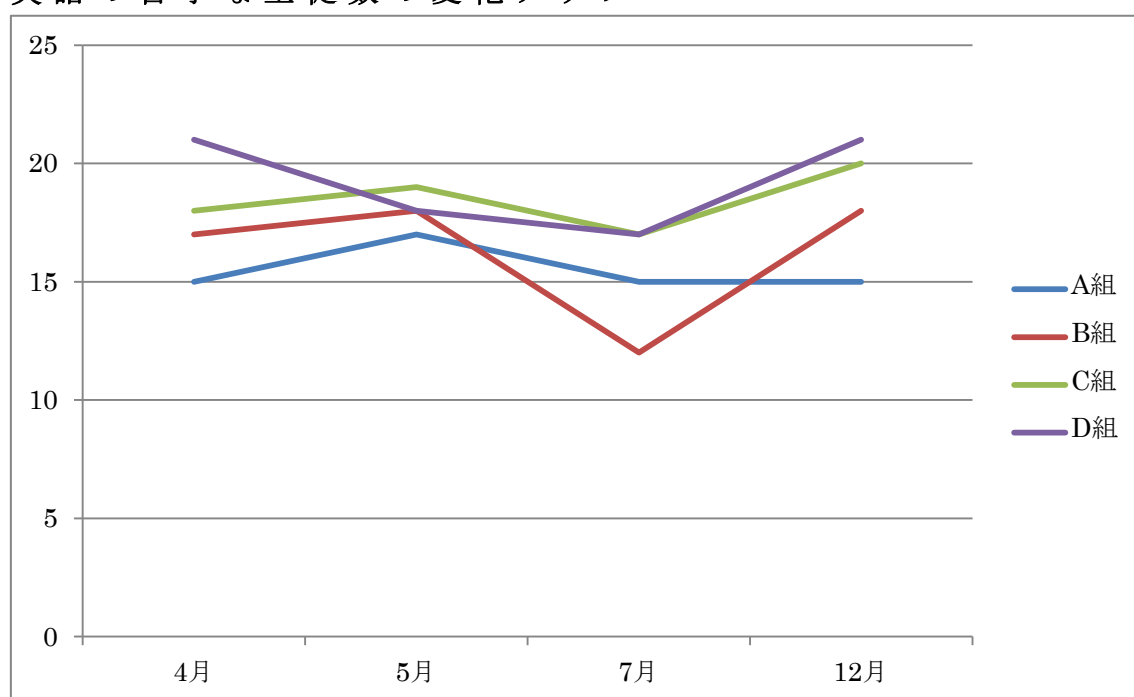
	A 組	B 組	C 組	D 組	合 計
4 月	1 2	8	9	1 0	3 9
5 月	7	7	1 6	9	3 9
7 月	6	7	1 1	5	2 9
12 月	1 0	4	1 2	1 3	3 9

ち着かないと、指導者は、どうしても注意する時間や言葉が必要になってくる。その結果、教室の雰囲気も悪くなってしまう。逆に、授業態度の良いクラスでは、注意する必要もなく、計画通り（あるいは思った以上に）スムーズに指導を進めることができるため、教室の雰囲気も良く、その結果英語嫌いの生徒数も減少したのではないかと考えられる。また、5 月に第 1 回の実験授業において B 組は、授業参観になってい

た。保護者の方々に英語の授業を見ていただき、安心感を与えたことも生徒たちの態度に多少なりと影響を及ぼしているのかもしれない。

全体としては、一学期末にかなり「英語が嫌いな生徒数」は減少していたのであるが、2 学期には入学時の人数にもどっている。しかしながら、第二章第一節で示したベネッセのアンケートでは、英語が嫌いになる時期は、第 1 学年の 2 学期末が 26%と圧倒的に多かったことを考えると、「英語の嫌いな生徒数」に入学時とあまり変わらない状態を維持できたことは、評価できよう。

英語の苦手な生徒数の変化グラフ



「英語がとても苦手」または「どちらかという苦手」と答えた生徒数のクラス毎の変化を表している。

どのクラスも英語に苦手意識を持っている生徒数は、一学期末には、入学時より減少し二学期末には増加している。

	A 組	B 組	C 組	D 組	合 計
4 月	1 5	1 7	1 8	2 1	6 1
5 月	1 7	1 8	1 9	1 8	7 4
7 月	1 5	1 2	1 7	1 7	7 1
1 2 月	1 5	1 8	2 0	2 1	7 2

第二項 インタビュー

この項では、「英語がとても嫌いでとても苦手な生徒」と「英語がとても好きでとても得意な生徒」のインタビュー結果をもとにアンケート調査だけではわからなかった生徒たちの内面を明らかにしていく。

① 英語が「とても嫌い」で「とても苦手な生徒」インタビュー

Fさんは、アンケート調査（2013年12月実施）において、「英語がとても嫌い」で「とても苦手」を選択している。授業中は、真面目な態度で英語を学習している。しかし、テストの成績は、悪く、忘れ物もときどきある。

どういう時に「英語が嫌い・苦手」と感じるかという質問に対して、Fさんは、次のように述べている。

「英語がとても嫌い」で「とても苦手」な理由
英語の単語が書けなかったりとか、発音が分かりにくかったりとかするところです。

5月に実施したアンケート調査では、「英語がとても嫌い」を選択し、その理由として「単語が覚えれない。」と書いている。「英語がとても苦手」を選択し、その理由は「むずかしい。」であった。7月に実施したアンケート調査では、「英語がどちらかという嫌い」を選択していた。その理由は、「テストの点数が悪すぎた。」と書いている。また「(英語が)やや苦手」を選択し、その理由として、「言うことはできるけど、文字で書いてあるとき、読むことができない。」と書いている。

12月に実施したアンケート調査には、Fさんは、英語がとても嫌いな理由を「テストの点数が低い。勉強してもかわらない。」とテストの成績が悪いことを再びあげている。また「英語がとても嫌い」な理由として「発音がよくわからない。単語のつづりが意味不明だから覚えれない。」と書いている。このことから、Fさんは、英単語の習得に難しさを感じていることが分かる。英語独特の発音やつづりに戸惑う生徒は多い。文法構造の難しさ以前に、単語の学習がまず第一のハードルとなっているとわかる。

ICT を活用した授業については次のように述べている。

ICT を活用した授業に対する感想（下線部、括弧…筆者加筆）

授業がスムーズに進んで、早く授業が進むのでいいと思います。（紙のフラッシュカードを使うのに比べると）繰り返し（発音）することが 2 回しかできないところが、不備なんですけど、どんどん早く進んでいくのでいいと思います。いろんな人にあてていく（指名して発音練習をする時）のが、一回押しちゃうと次の単語にすすんでしまうので、それが（不備だと思います）。

（車いすバスケットの動画については、）ああいう 動画を見れてわかりやすかったのでいいと思います。

全体的に ICT の使用については、肯定的である。ただし、デジタルテキストのフラッシュカードは、紙のフラッシュカードに比べると融通がきかない。速さを変えたり、ランダムに提示することは可能であるが、集中して学習させたいときは F さんの指摘にあるように「不備」と言える。

協同学習については、次のように述べている。

協同学習に対する感想（下線部、括弧…筆者加筆）

隣の人とか班の人とかと話したりできるし、自分のわからないところを教えてもらったりもできるので、かかわり合いがすごい深まったかなあ、と思います。アリスとかでも、前に立つ機会があまりないんですけど、それでも班で聞き合ったりして協力するのが、すごい、ほんと、自分のわからないところを見てくれるんですすごいわかってきたと思います。

協同学習に対しても F さんは、肯定的にとらえている。周りの生徒たちからの援助や協力があつたことがうかがえる。「英語の授業の中で楽しかった活動はありますか」という質問に対しては、以下のように答えている。

英語の授業で楽しかった活動（下線部、括弧…筆者加筆）

単語を組み合わせでそういう言葉になりますよ、ていうのが、字を書くとかそういうのが（楽しかった。）みんなで回って「あなたは何かができますか。」っていうのを聞いたりして、インタビューするやつ（活動）が面白かったです。

英語を用いての他者との関わり合いを楽しんでいる様子が見える。

② 英語が「とても好き」で「とても得意な生徒」インタビュー

B さんは、アンケート調査において、常に「英語がとても

好き」で「とても得意」を選択している。授業態度は、良好で熱心に取り組んでいる。指導者の言うことをしっかりと聴いている様子が伝わってくる。発音も抜群に良く、周りの生徒たちからも称賛を受けている。英語の成績も常にトップクラスで、筆記試験の回答に間違いはほとんどない。

どんな時に「英語が好き」と思うかという質問（2013 年 12 月実施インタビュー）に対して次のように述べている。

「英語がとても好き」で「とても得意」な理由（下線部，括弧…筆者加筆）

英語が、普段使って意味が分かったりとか、英語の勉強をしていたときに過去にやっていた（学習していた）ことで全然わからなかったこととかが「あ、わかるようになった」とかという時にやっぱりちょっと成長したのかな、と思います。

B さんの英語学習歴は、長い。3 歳に満たないころから学習を重ねてきている。くもん教室に継続して通っている。自ら成長を実感できることも多いようだ。英検は、中学入学時には、すでに準 2 級に合格していた。入学直後のアンケート調査（2013 年 4 月実施）では「基本からしっかりと英語の力（コミュニケーション力、発音などなど）をつけていきたいので、しっかりご指導よろしくお願いします。」と意欲に満ちた考えを書いている。今までも外国に行ったことはないが、英検に挑戦することが、学習意欲を高めてきたという。

学習法については、次のように述べている。

B さんの学習法（下線部，括弧…筆者加筆）

単語カードとかをひたすら覚えて、文法とかは、くもんやってたんでそれですっとやってたのでなんか、それで覚ええました。

「英語は得意ですか、苦手ですか？」とのアンケート調査（2013 年 12 月実施）においては「とても得意」を選択している。理由として「もともと小さい頃からがんばっていたからかな、と思います。」と書いている。学校外での英語学習との出会いがうまくいくと、学校の英語学習もスムーズに楽しめることが多い。

ICT の活用については、次のように述べている。

ICT を活用した授業に対する感想（下線部，括弧…筆者加筆）
（デジタルテキストについて）いいなあ、と思ったのが、発

音面でやっぱりすごい正しいんで、私もCD聞いてずっと真似して覚えてきた方なので、それは結構いいことだと思って（います）。もう一つとしては、デジタルテキストを見て、わかりやすいように工夫が凝らしてあるので、やっぱりそこは英語が苦手な人でも教科書とか文がひたすら書いてあるのを読むよりは、一回一回ちょっとわかりやすくしてある方がわかりやすいかな、と思います。（教科書本文が画面に映し出された時）マーカーとかでいろいろ（書き込みが）できるのは、先生もここが重要ですよっていうのを工夫がある中で説明しやすいし、生徒にとってもわかりやすいと思う。絵が動いたりとかするやつ（動画）もあるので教科書だとそういう動きが少ないので、（デジタルテキスト）はわかりやすくなるかな、と思いました。

Bさんは、デジタルテキストの中でもネイティブスピーカーの音声を評価している。Wさん自身もCDを「真似して覚えてきた」と学習法について振り返っている。「学ぶ」は、「まねる」ところから始まる。特に語学学習において、「真似をする」ことは、重要な活動である。ネイティブスピーカーの音声と画面がリンクしていることでより印象に残りやすくなっている。2013年7月に実施したアンケート調査では「英語がとても好き」な理由として「発音の研究がおもしろいから」と発音に興味を示している。

また、動画についても「わかりやすい」と感じている。本文への書き込みもスクリーン上でできる仕組みになっているため、重要な箇所をはっきりと示すことができる。

アンケート調査（2013年12月実施）において4月からの英語授業で楽しかったこと、役立ったと思うこととして「単語テスト」を上げている。その理由は、「単語を必死で覚えることができました。」と書いている。単語を覚えることが、Bさんにとっては、楽しい活動になっている。

語彙力は、語学学習にとって重要な要素である。それをどのように伸ばしていくのかは、大きな課題であると言える。英語の音声を学ぶこととスペルを正しく書く事は、密接に関係している。Wさんのように発音に興味があり、真似ることを習慣としてきた生徒にとって英語学習は楽しい活動になっている。

さて、以上のような結果から研究仮説「協同学習を取り入れることにより生徒同士が学び合い、英語を用いる楽しさを感じることができる」「ICTと協同学習の組み合わせによって

英語でプレゼンテーションする楽しさが創出でき、それが英語嫌いをある程度防ぐ効果がある」「ICT と協同学習の両者の強みを生かし、生徒同士のコミュニケーションツールとして ICT を活用することで、子どもたちの英語学習に対する意識を変えることができる」ということが、第二章の生徒のアンケート調査やインタビューによって検証された。

ICT と協同学習が英語の楽しさをもたらしたことは明らかであるが、どのような楽しさを生み出したのであろうか。英語が嫌い苦手な F さんは、協同学習について「(班のみんなが) 自分のわからないところを見てくれるんですごいわかってきたと思います」と仲間との学び合いの効果に言及している。一人ではわからないことも班の仲間のサポートがあれば、理解することができる。

実験授業Ⅱでは、「スクリーンを使っていて、写真と単語が写っていたので覚えやすかったです」という意見があった。ICT を使用することは、イメージがしやすく、プレゼンテーションを効果的にする役割を果たしていた。

【引用・参考文献】

- ・ベネッセ教育研究開発センター
「第一回中学校英語に関する基本調査(2009 年調査)」
(2014 年 2 月 9 日確認)
http://berd.benesse.jp/berd/center/open/report/chu_eigo/hon/
- ・ゼレミー・ハーマー (1995) 「人はなぜ英語を学ぶか」
『学芸』第 42 号 (1995) 和歌山大学 学芸学会
- ・神戸大学附属住吉中学校 神戸大学附属中等教育学校
(2009) 『生徒と創る協同学習』 明治図書
- ・三重大大学教育学部附属中学校
『三重大大学教育学部附属中学校 中間公開研究会
研究レポート・指導案集』
研究テーマ
ともに学びともに高めあう学校の創造
～未来を創る「人間力」をもつ生徒の育成～)』
2013.11
- ・ジョンソン, D.W. ジョンソン, R.T. ホルベック, E.J. (2010)
石田裕久、梅原巳代子訳
『学習の輪 アメリカの協同学習入門』 二弊社

終わりに

1) 研究の到達点

本研究で明らかになったことは以下の3点である。

1つ目は、「協同学習を取り入れることにより、生徒同士が学び合い、英語を用いる楽しさを感じることができる」という可能性である。全国の多くの例に見られたようにF中学校においても協同学習を取り入れることによって英語を用いる楽しさを生徒たちが感じたことは、実験授業Ⅰのアンケート結果から明らかになった。実験授業Ⅰに対して「とても楽しかった」「楽しかった」を含むと100パーセントの生徒たちが英語での名刺交換に楽しさを感じたという結果であったことから実証されたと言える。

2つ目は、「ICTと協同学習の組み合わせによって英語でプレゼンテーションする楽しさが創出でき、それが英語嫌いをある程度防ぐ効果がある」ということである。このことは、第二章におけるアンケート結果と抽出生徒のインタビュー結果から明らかになった。アンケート結果においては、一学期末の実験授業Ⅱの後、「英語がとても嫌い」または「どちらか」というと嫌い」な生徒数が減少したことから明らかになった。

3つ目は、「ICTと協同学習の両者の強みを生かし、生徒同士のコミュニケーションツールとしてICTを活用することで、子どもたちの英語学習に対する意識を変えることができる」ということである。第一章で述べたように「ICT」と「協同学習」にはそれぞれ独自の歴史があり、特長がある。その2つを組み合わせることによって、多彩な学習が創造でき、その結果として生徒たちの意識を変えることができる。

2) 今後の課題

本研究では、「ICT」と「協同学習」を取り入れることで、生徒たちの英語学習に対する意識を変えることができると明らかになった。しかし今後の課題がいくつかある。本研究における課題を以下に述べる。

今回の実験授業では、教師が準備し、生徒たちはそのルールに乗って実践を行った。もっと自由に彼らの言葉でプレゼンテーションを作っていくことも可能である。自らの言葉で英語を使って「ICT」という現代的なツールを用いて、生徒た

ち自身が生徒に向かって対話していく試みが考えられる。

今後の研究において、研究方法を工夫しながら、「ICT」と「協同学習」を用いた教育実践とその効果について引き続き探究していきたいと考えている。

3) 謝辞

本論文を執筆するにあたり、多くの方々にお世話になりました。本当にありがとうございます。

ジョンソン、ジョンソン&ホルベックの「学習の輪」の最初には次のようなエピソードが書かれています。

1982年7月15日、シアトルのビジネスマン、ドン・ベネットは四肢に障害をもつ者としては初めて、ワシントン州のレーニア山の登頂に成功した。彼は、片足と二本の松葉杖を使って4392mの高さを登りきったのである。5日がかかりであった。このことを通して学んだもっとも大切な教訓は何かとたずねられると、彼はためらわずにこう答えた。「何事もひとりではできない、ということです。」(下線部筆者加筆)

(1998年の杉江修治・石田裕久・伊藤康児・伊藤篤の訳では「彼は即座に『ひとりでやれるものではない』と答えた。」となっていて、その表現の微妙な違いも面白く感じました。)

論文の執筆は、孤独な作業です。しかしながら、その完成までには、なんと多くの方々の御協力をいただいたことでしょうか。「とてもひとりでは成し遂げられなかった」と痛感しています。

「大学院で学びたい」というのは、筆者の長年の夢でした。いろいろな困難があってもなかなか実現しなかったのですが、念願かなって2012年4月から2年間三重大学で学ぶことができたのは、とても幸運なことでした。

まず、大学院を受験することを迷っていたとき、背中を押して下さったF中学校の先生方に感謝致します。「こんな年で大学院に行くのはいかがなものか」「職場にご迷惑をおかけするのではないか」等、葛藤は大きかったのですが、そんな中「勉強したいと思った時が勉強する時」と励ましていただけたことを本当にありがたいことであつたと、今もその時の光景と喜びを思い出します。

また、修論執筆中も「調子は、どうですか」「お疲れのでませんように」と先生方から度々お声がけをいただきました。特に2年目は、F中学校での勤務と修士論文の執筆で慌ただしい日々でしたが、なんとかここまでのどり着けたのは、F

中学校の先生方のご支援あってのことと深く感謝申し上げます。

F 中学校の 1 年生のみなさん、たびたびアンケートに協力してくださってありがとう。インタビューにも快く応じていただいたおかげで、研究を深めることができました。

森脇先生には、本当にお世話になりました。個別ゼミに時間を割いていただき、鋭く厳しいアドバイスをくださいました。そのお言葉を拝聴する度に目が見開かれる思いがしました。また、moodle で度々コメントをいただき、感謝しています。森脇先生のおかげで、無事に修士論文が書けたと思います。本当にありがとうございます。

ゼミでの発表で様々な角度から意見を言って下さった先輩方と研究室のみなさん、ありがとうございます。ともに学んでいるみなさんがいたおかげで、とても心強く、前に進んでいくことができました。ご指摘と具体的なアドバイスは、本当に助かりました。本当にありがとうございます。

最後に厳しい状況の中、常に筆者を信じ、支えてくれた家族と両親に感謝致します。

この修論を完成させたことで、「研究」の大変さと面白さを知ることができました。そして何より、私 1 人の力ではなく、周囲の方の力のありがたみを改めて感じることができました。

「修士論文は、研究論文であり、研究史に一石を投じるものである。今までの研究を半歩でも一歩でも進める必要がある」という言葉は重く、誠に微力ながら研究をするということの責任を感じました。今回学んだことを生かし、少しでも社会に貢献できるようこれから力を尽くしていきたいと切望しています。

私を支えてくださったすべてのみなさんに心を込めて、心から感謝を申し上げます。ありがとうございました。

2014 年 02 月 13 日

坂倉 好子